

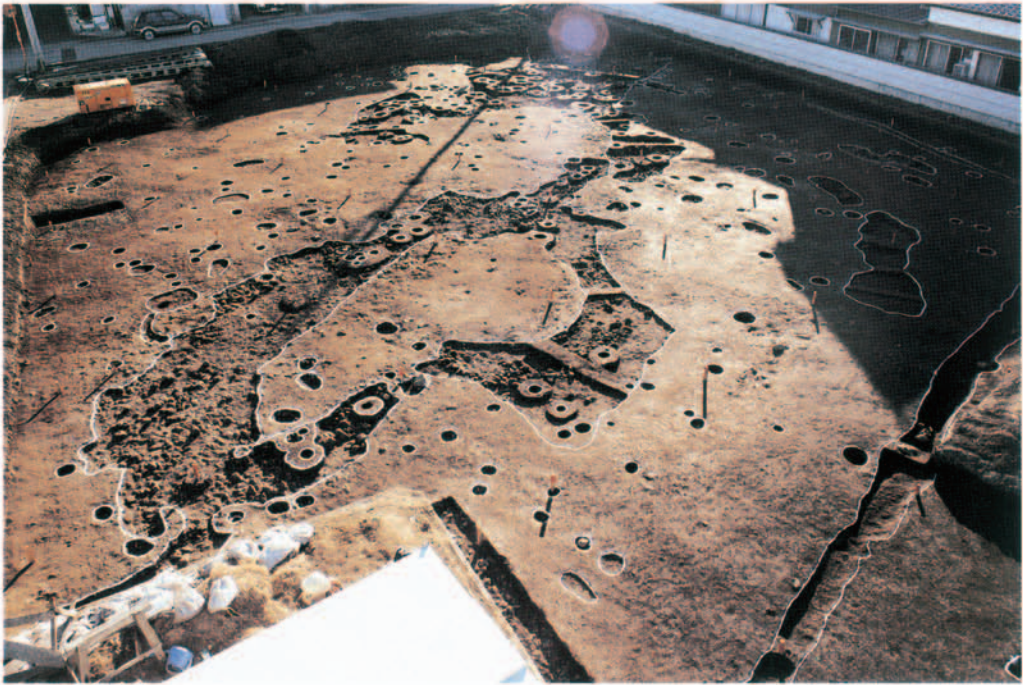
高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集

ひびのきサウジ遺跡Ⅱ

土佐山田観光開発株式会社寮建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



遺構完掘状況（北より）

ひびのきサウジ遺跡Ⅱ

土佐山田観光開発株式会社寮建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

高知県には約3,000箇所もの遺跡が知られており、この度調査を行いました土佐山田町には、その内の200箇所が所在しております。

これらの遺跡は、この地上に刻まれた我が先人達の足跡であり、私達の歴史を現代、そして未来へと語り継いでくれる、貴重な文化遺産であります。

この度の調査は、土佐山田観光開発株式会社の寮建設に先立ち、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが、当遺跡の記録保存を行うことを目的として実施したものであります。その結果、弥生時代及び中世に営まれた人々の生活の跡が、建物跡や溝跡として確認でき、大きな成果を上げることができました。

本書が歴史及び考古学等、学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この度の調査に際しまして多大な御協力をいただきました土佐山田観光開発株式会社をはじめとする関係者、ならびに地域の住民の方々に、心より御礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 小橋 一民

例 言

1. 本書は土佐山田観光開発株式会社寮建設工事に伴う、ひびのきサウジ遺跡の発掘調査報告書である。
2. ひびのきサウジ遺跡の所在地は高知県香美郡土佐山田町楠目字サウジ877-1である。
3. 調査対象面積は1,149.87㎡であり、発掘調査面積は800㎡である。調査期間は平成2年11月26日～平成3年1月9日である。
4. 発掘調査及び整理事業は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室（現・埋蔵文化財センター）が実施し、曾我貴行（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室事業課調査員 {現・埋蔵文化財センター調査第1係調査員}）が担当した。調査事務は、筒井作郎（財団法人高知県文化財団総務課長）・岡崎康明（財団法人高知県文化財団総務課主幹）・三浦康寛（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター主幹）が行った。
5. 本書の執筆、写真撮影、編集等は曾我が行った。
6. 遺構については、SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑状遺構）、SD（溝状遺構）、P（ピット状遺構）で標示し、遺構番号はそれぞれの通し番号である。
7. 出土遺物の縮尺はすべて $\frac{1}{2}$ であり、図版番号及び挿図中の番号は、実測図の番号と一致している。
8. 報告書に掲載の Fig. 1は「国土地理院1：25,000地形図土佐山田」を複写して使用し、Fig. 2は「1：2,500高知広域都市圏7」を複写縮小して使用した。
9. 遺構測量ならびに遺物の取り上げは任意座標で行い、挿図中の標高は海拔高を示す。
10. 調査に当っては、土佐山田観光開発株式会社をはじめ、土佐山田町教育委員会、ならびに地元の方々に多大な御協力をいただいた。また、調査全般に互って、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター、高知県教員委員会、及び高知県立歴史民俗資料館の諸氏から御助言、御協力を賜り、整理事業では財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの整理事業員の皆様に御協力いただいた。記して衷心より謝意を表したい。
11. 遺跡の略号は「90YHS」とし、出土遺物の注記等にはこれを使用した。
12. 出土遺物等は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

報告書要約

1. 遺跡名 ひびのきサウジ遺跡 遺跡番号190114 遺跡地図No.15-229
2. 所在地 香美郡土佐山田町楠目字サウジ 877-1
3. 立地 土佐山田町市街地東端部 標高約50m
4. 種類 弥生時代～中世（集落跡）
5. 調査主体 ㈱高知県文化財団 埋蔵文化財センター
6. 調査契機 寮建設事業
7. 調査期間 平成2年11月26日～平成3年1月9日
8. 調査面積 800㎡
9. 検出遺構〔弥生時代〕P40基
〔中世〕SB4棟、SK3基、SD2条、P55基
〔時期不明〕SK8基、SD2条、P250基
10. 出土遺物 弥生土器、須恵器、土師質土器、須恵質土器、青磁、染付、瀬戸焼、備前焼、土錘
11. 内容要約 ひびのきサウジ遺跡は、高知県中央部以東の弥生後期後半～古墳時代初頭土器の標式遺跡であるひびのき遺跡に西接し、平成元年度に一度発掘調査が実施されている。今次調査では中世を主体とする建物跡等を確認することができ、平成元年度調査区で検出された遺構群と一連の広がりの中で捉えられるものである。特に中世の建物跡の棟方向、及び溝状遺構の方向には何らかの規制がはたらいしていると考えられ、これはひびのき遺跡群の中世集落を再考する上での貴重な視点となる。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の概要	6
1. 調査の方法	6
2. 基本層序	6
3. 第Ⅲ層出土の遺物	6
4. 表採の遺物	8
第Ⅳ章 検出の遺構・遺物	10
1. 掘立柱建物跡	10
2. 土坑状遺構	14
3. 溝状遺構	20
4. ピット状遺構	22
第Ⅴ章 総括	28

挿 図 目 次

Fig. 1	ひびのきサウジ遺跡と周辺の遺跡 1	3
Fig. 2	ひびのきサウジ遺跡と周辺の遺跡 2	5
Fig. 3	基本層序	7
Fig. 4	表採及び第Ⅲ層出土遺物実測図	9
Fig. 5	S B 1・S B 2	11
Fig. 6	S B 3	12
Fig. 7	S B 4	13
Fig. 8	S B 4 出土遺物実測図	14
Fig. 9	S K 2	15
Fig. 10	S K 1・3・4・5	15
Fig. 11	S K 3・S K 4 出土遺物実測図	16
Fig. 12	S K 6・7・8・9・10・11	17
Fig. 13	S D 1・S D 3	19
Fig. 14	S D 1 出土遺物実測図 1	19
Fig. 15	S D 1 出土遺物実測図 2	21
Fig. 16	P 3・8・11・21・22・24・49・53・56・69・79・81	23
Fig. 17	ピット状遺構出土遺物実測図	25

表 目 次

表 1	ひびのきサウジ遺跡と周辺の遺跡一覧表	2
表 2	ピット状遺構計測表	27
表 3	遺物観察表 1	30
	遺物観察表 2	31
	遺物観察表 3	32

図 版 目 次

- P L. 1 遺構検出状況、遺構完掘状況
- P L. 2 遺構検出状況、遺構完掘状況
- P L. 3 遺構検出状況、遺構完掘状況
- P L. 4 調査区西壁セクション
- P L. 5 調査区東壁セクション、調査風景
- P L. 6 S D 1 土師質土器皿出土状況、S D 1 須恵質土器出土状況
- P L. 7 S D 1 備前焼壺出土状況、S D 1 土師質土器鍋出土状況
- P L. 8 S D 3、P 3 弥生土器出土状況
- P L. 9 P 8・P 9、P 8 弥生土器出土状況
- P L. 10 P 21、P 21 弥生土器出土状況
- P L. 11 P 53 土錘出土状況、P 81 弥生土器出土状況
- P L. 12 出土遺物 1 (表採・包含層出土)
- P L. 13 出土遺物 2 (表採・S B 4・S D 1・P 3・P 49 出土)
- P L. 14 出土遺物 3 (S D 1 出土)
- P L. 15 出土遺物 4 (S D 1・P 8・P 81 出土)
- P L. 16 出土遺物 5 (P 11・21・24・53・68・79 出土)

第 I 章 調査に至る経過

ひびのきサウジ遺跡は、高知県中央部以東の弥生時代後期後半～古墳時代初頭土器の標式遺跡として非常に著名なひびのき遺跡に西接する遺跡である。そして平成元年度に遺跡の一部に実施された緊急発掘調査により、ひびのき遺跡と一連の広がりを見せる大規模な弥生～古墳時代集落遺跡であり、またその廃絶後古代から中世にかけても集落が形成された複合遺跡であることが明らかとなり、高知県内外を問わず大きな関心を集める遺跡となっていた。

この遺跡の一角に、土佐山田観光開発株式会社が寮を建設するという計画が持ち上がったのは平成2年11月のことである。直ちに高知県教育委員会との間で埋蔵文化財の保護について協議がなされた。しかし、現状保存は不可能ということから、止むを得ず記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなり、発掘調査は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室が受託して行うこととなった。発掘調査期間は平成2年11月26日から平成3年1月9日までであり、発掘調査面積は800㎡である。

調査対象地は、調査前に土佐山田観光開発株式会社が独自に表土除去を行い、排土を調査区外へ搬出していた。そのため、遺構及び遺物包含層の一部は掘削・除去されていた。

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

ひびのきサウジ遺跡は、高知市の東方約20kmの香美郡土佐山田町にある。土佐山田町は高知平野の東部を南流して太平洋に注ぐ物部川の中～下流域にあり、高知県下最大の穀倉地帯である香長平野の北端に当たる。ひびのきサウジ遺跡は、物部川右岸の長岡台地と呼ばれる洪積台地上に立地しており、現在の土佐山田町市街地の東端部に所在する。

土佐山田町に所在する遺跡は、高知県教育委員会が昭和63年から平成元年にかけて実施した遺跡分布調査によると、その数約200といわれ、高知県において屈指の遺跡稠密地帯を形成している。遺跡の内容も縄文時代から近世に到るまでの各時代の遺跡が連続と営まれており、古来集落立地には格好の地であったことを物語っている。以下、土佐山田町に所在する各時代の遺跡について概述してみたい。

縄文時代 早期の飼古屋岩陰遺跡が土佐山田町においては最古の縄文時代遺跡として挙げることができる。早期の押型土器及び、多量のサヌカイト製石鏃等が出土しており、吉野川上流地域では最古の遺跡として知られている。

弥生時代 長岡台地及び香長平野全体で遺跡数の急増する時代で、土佐山田町域では中期以後の遺跡の存在が確認されている。中期では、土佐山田市街地東方の三室山中腹に立地する龍河洞洞穴遺跡、物部川右岸の新时期状地上立地する原遺跡、原南遺跡及び稲荷前遺跡等を挙

表1 ひびのきサウジ遺跡と周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	28	山ノ間丸遺跡	中世	55	時久遺跡	古墳
2	入野南遺跡	平安～中世	29	予岳古窯址群	古墳～平安	56	町田堀東遺跡	縄文～中世
3	ハノ谷窯跡	平安	30	予岳古墳	古墳	57	秋葉山城跡	中世
4	積セカイ釜跡	古墳～奈良	31	メウカイ遺跡	弥生～中世	58	前ノ山城跡	〃
5	大谷古窯址群	奈良～平安	32	長谷川丸遺跡	古墳～平安	59	西佐古遺跡	平安～中世
6	三反山田窯跡	平安	33	伏原遺跡	弥生～平安	60	クロアイ遺跡	弥生～中世
7	新改古窯址群	古墳～平安	34	鏡野芋園古墳	古墳	61	野々下遺跡	古墳～平安
8	小山田1～2号古墳	古墳	35	小倉山古墳	〃	62	下夕野遺跡	古墳～中世
9	屋甫田丸遺跡	中世	36	ひびのき岡の神付遺跡	弥生～中世	63	黒七遺跡	弥生
10	南ケ内遺跡	弥生～古墳	37	大塚遺跡	〃	64	東時光石遺跡	古墳
11	新改古墳群	古墳	38	大塚古墳	古墳	65	大領遺跡	古墳～中世
12	西ノ内窯跡	〃	39	ひびのき遺跡	弥生・古墳	66	ヤイタ遺跡	〃
13	薬原神社遺跡	奈良～中世	40	ひびのき大河内遺跡	弥生～近世	67	下門田遺跡	〃
14	タンガン窯跡	飛鳥	41	楠目城跡	中世	68	宮後遺跡	弥生～平安
15	タンガン窯古墳	古墳	42	田所神社遺跡	弥生～中世	69	姥ヶコク遺跡	古墳～平安
16	タンガン遺跡	平安	43	城田遺跡	〃	70	神通寺遺跡	弥生～平安
17	須江北遺跡	古墳～平安	44	前ノ芝遺跡	弥生～平安	71	七反田遺跡	奈良～平安
18	須江上段遺跡	古墳～近世	45	大西土居遺跡	弥生	72	ロ河遺跡	古墳～中世
19	須江駅跡	平安	46	楠目遺跡	弥生～近世	73	坂西遺跡	〃
20	権南土居遺跡	平安～中世	47	稲荷前遺跡	〃	74	中井ノ北遺跡	奈良～平安
21	植村城跡	中世	48	古町北遺跡	弥生・古墳	75	東白井遺跡	古墳
22	植カドク遺跡	弥生・古墳	49	古町西遺跡	弥生～平安	76	新野遺跡	〃
23	西クレドリ遺跡	弥生～近世	50	原遺跡	弥生～近世	77	松原丸遺跡	奈良～平安
24	モジリカウ遺跡	〃	51	高柳土居城跡	中世	78	松原丸下遺跡	〃
25	前山1・2・3号古墳	古墳	52	高柳遺跡	弥生～中世	79	山田三ツ又西遺跡	古墳～平安
26	前行古墳群	〃	53	三ツ橋遺跡	古墳～平安	80	山田三ツ又遺跡	〃
27	植キノサキ遺跡	中世	54	原南遺跡	弥生～近世	81	山田三ツ又東遺跡	弥生～近世

(表中のNo.はFig. 1及びFig. 2中の数字に対応する)

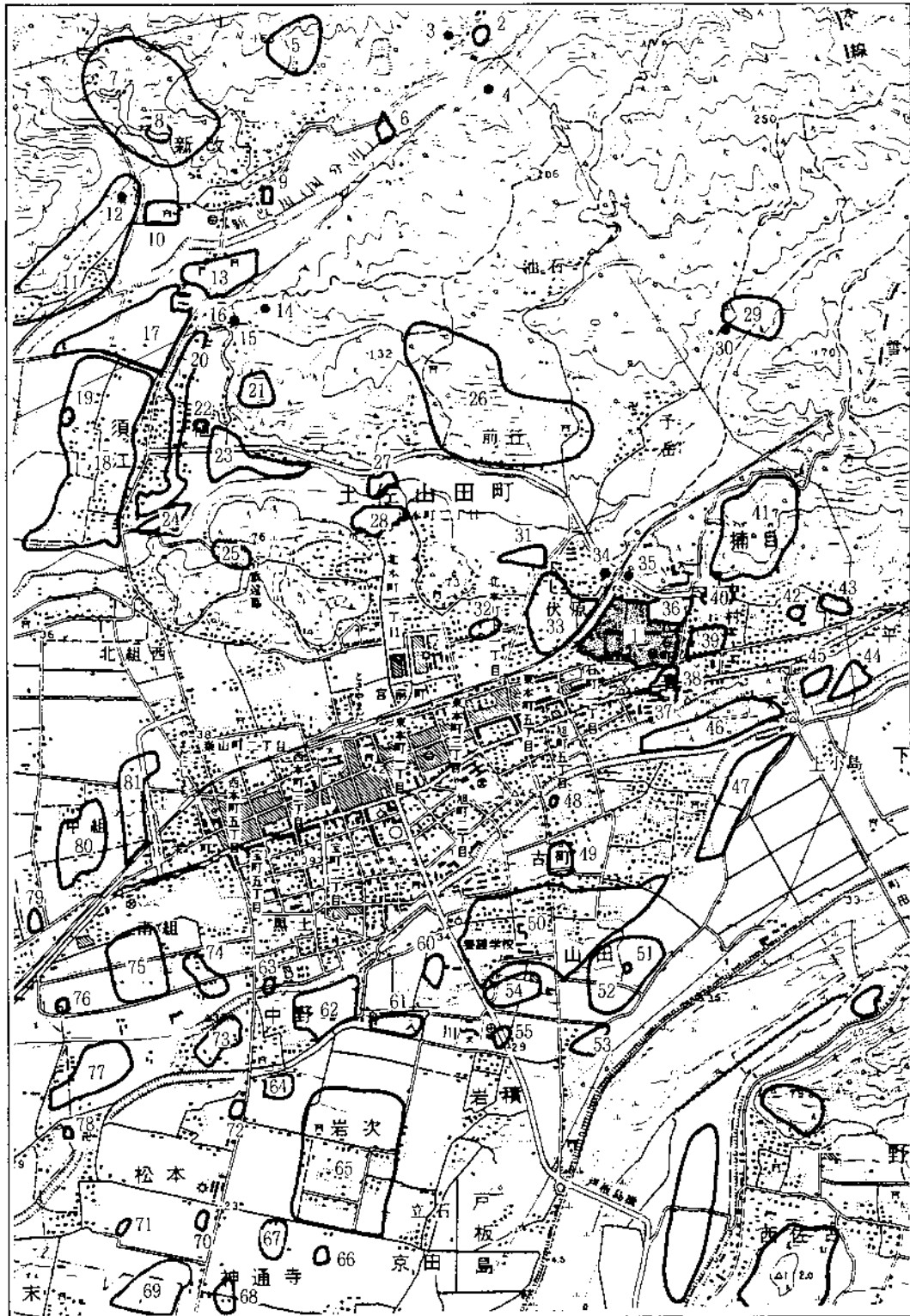


Fig. 1 ひびのきサウジ遺跡と周辺の遺跡1 (S = 1 : 25,000)

げることができる。後期後半から古墳時代初頭にかけては、香長平野全域で特に集落遺跡数の増加が著しい時期として捉えられよう。物部川左岸の林田遺跡、右岸のひびのき遺跡、そしてひびのきサウジ遺跡もこの時期を代表する遺跡として挙げるができる。特にひびのき遺跡から出土した弥生後期後半～古墳時代初頭の土器群は、ひびのきⅠ～Ⅲ式土器と命名され、高知県中央部以東の標式土器とされて久しい。

古墳時代 古墳時代初頭には、弥生時代後期後半から継続して営まれたひびのき・ひびのきサウジの両集落遺跡が存在するが、これ以後に位置付けられる集落遺跡については明らかとなっていない。また、ひびのき遺跡群の時期に符合する前期古墳の存在もいまだ確認されておらず、弥生時代後期後半に始まる集落拡大に呼応した首長墓造営の有無や、採用された墳墓形態等不明な点が多い。後期古墳では、新改古墳群、前行古墳群など数箇所の古墳群を挙げることができ、ひびのきサウジ遺跡周辺でも、県内に現存する唯一の前方後円墳といわれる伏原大塚古墳¹¹⁾をはじめ、横穴式石室をもつ小倉山古墳・雪ヶ峯古墳などが存在している。

古代 須江遺跡群、植タンガン窯跡などをはじめとする窯跡の多いことが特筆でき、土佐山田町内で36基が確認されている。他に、香美郡衙跡といわれる大領遺跡、須江遺跡群内の須江駅跡推定地などの遺跡がある。また、平成元年度の調査によりひびのきサウジ遺跡から古代末の建物跡、溝跡、井戸跡等が確認されており、当該期の集落の存在が明らかとなっている。¹²⁾

中世～近世 城館跡では、高柳土居城跡、楠目城跡などが知られる。また、楠目城跡の南西に位置するひびのきサウジ遺跡¹³⁾、及び大塚遺跡¹⁴⁾から中世の集落、墓地等が確認されており、城郭に関連した遺構の広がりが推察される。

註

(1) 平成3年度に実施された発掘調査によって、前方後方墳の可能性が浮上してきている。

(廣田佳久「土佐山田町伏原大塚古墳」『埋文こうち』第5号 高知県教育委員会 1992年)

(2) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1990年

(3) 同註(2)

(4) 山本哲也・曾我貴行『大塚遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1991年

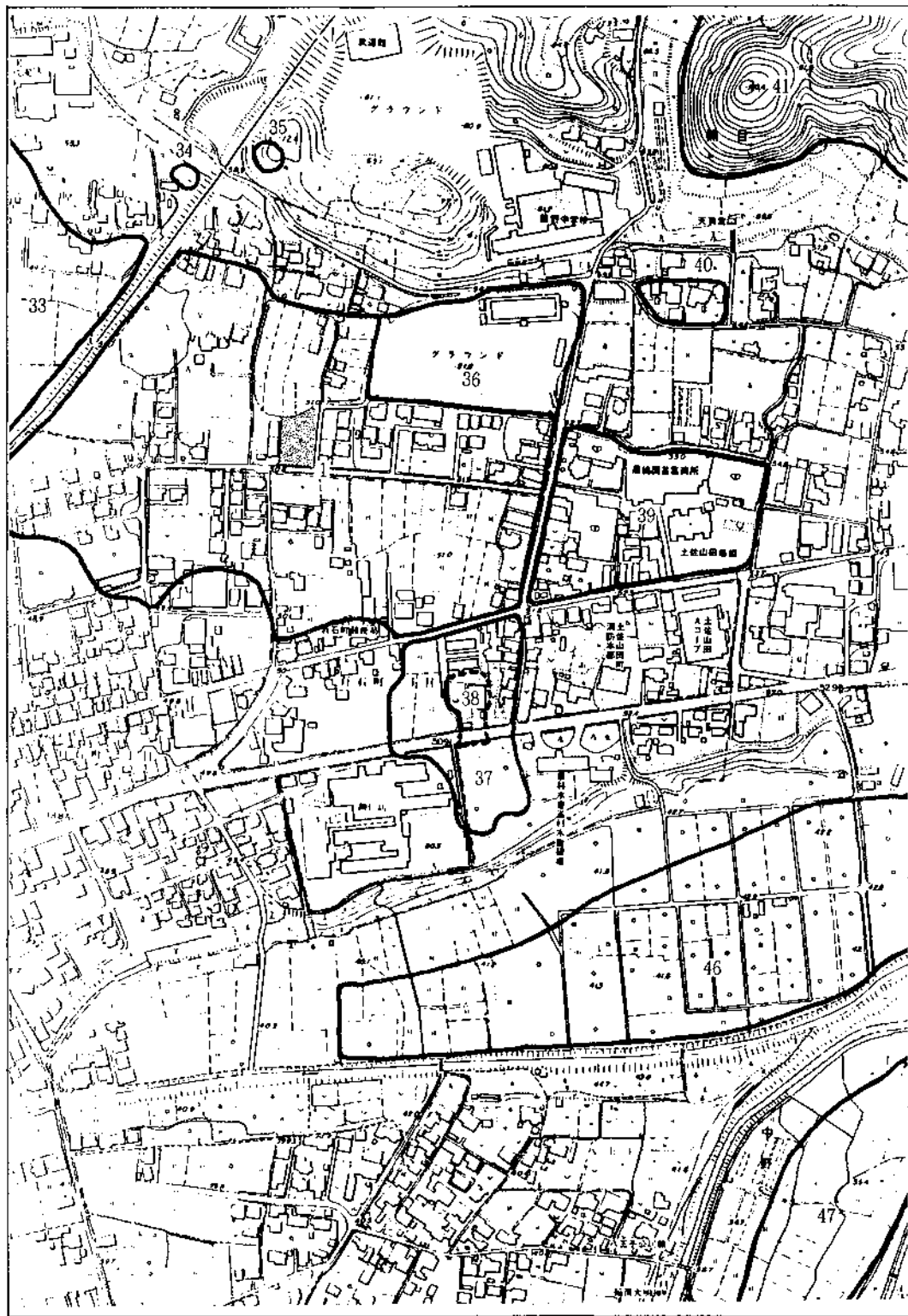


Fig. 2 ひびのきサウジ遺跡と周辺の遺跡 2 (S = 1 : 5,000)

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

調査対象地は「ひびのきサウジ遺跡」として周知された場所であり、遺構・遺物の遺存状態は非常に良好であることが予想されていた。また、土佐山田観光開発株式会社の寮建設に当たって、その工期及び設計の変更は既に不可能な、非常に緊急を要する情勢となっていた。これらの事情を鑑み、今次調査では遺構の分布状況等の確認を待つことなく、工事対象地全面の本格調査を実施することとした。

調査対象地の表土は、調査開始時までには土佐山田観光開発株式会社によって除去されていたため、重機（ユンボ）は使用せず、人力で遺構検出及び遺構の掘り下げを行った。しかし残念なことに、遺物包含層の殆どは既に取り去られてしまっており、調査開始時点で既に遺構面は地表に露出した状態にあった。

遺構実測及び遺物の取り上げについては、隣接する道路に任意に設定した基準点（ $X = 100,000$, $Y = 100,000$ ）をもとに、磁北方向を軸とする任意座標を設け、一辺4mのグリッドを最小単位として設定し、実施した。

2. 基本層序

調査によって確認された基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層：耕作土層

第Ⅱ層：暗灰褐色粘質土層

第Ⅲ層：黒褐色粘質土層

第Ⅳ層：明褐色粘質土層

第Ⅴ層：黄褐色砂礫土層

第Ⅰ層には遺物は殆どみられず、第Ⅱ層・第Ⅲ層に遺物が多く含まれる。遺構は第Ⅲ層及び第Ⅳ層の上面から掘り込まれていることから遺構面は2枚存在し、また第Ⅱ層・第Ⅲ層がそれぞれに対応する遺物包含層となっている。第Ⅴ層は、ひびのき遺跡群に共通する堅く締まった洪積台地の地山層である。

3. 第Ⅲ層出土の遺物

第Ⅲ層より出土の遺物としては、弥生土器168点、須恵器12点、土師質土器87点、瓦質土器1点、備前焼1点、青磁1点等が挙げられるが、図示できたのは土師質土器2点のみである。

土師質土器（Fig. 4-5・12）

5は杯の底部片で、平底から外穹気味に立ち上がる体部をもつ。ロクロ成形で、ロクロによ

る回転ナデ調整を施し、底部は回転糸切りによる切り離しである。12は鍋の口縁部片で、口縁部直下外面に下外方に垂れる鐔状の突帯をもつ。ナデ調整によっており、外面には煤の付着が顕著である。

4. 表採の遺物

調査中に表面採集できた遺物は、弥生土器7点、須恵器2点、土師質土器7点、近世磁器1点等であり、このうち図示できたのは弥生土器2点、須恵器2点、土師質土器6点である。以下、器種別に記述する。

弥生土器 (Fig. 4-1・2)

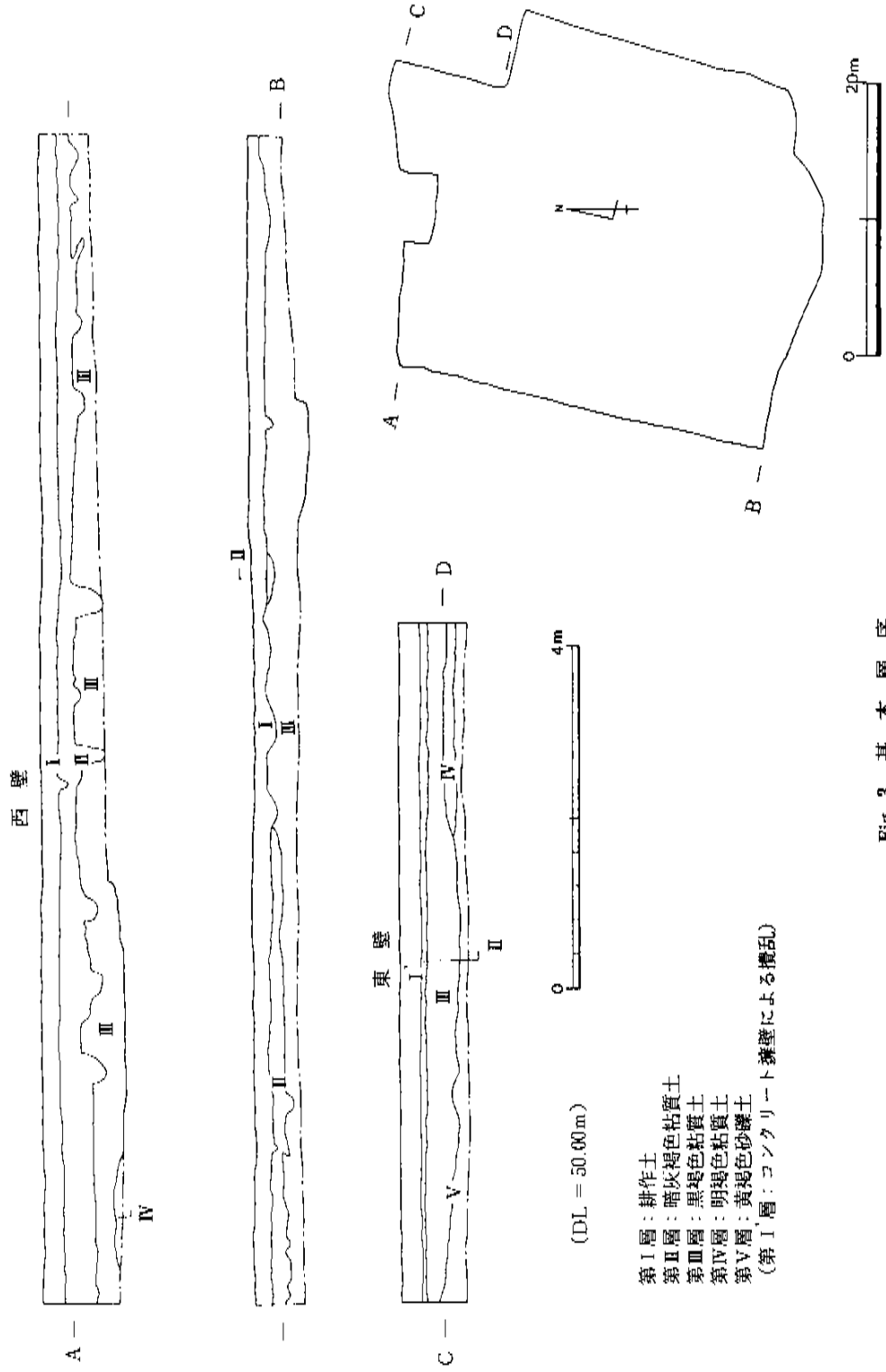
1は甕の底部片で、明瞭な平底を呈す。外面はタタキ、内面はナデ調整である。2は鉢の底部片で、底部は上げ底状を呈す。外面はタタキ、内面はナデ調整である。

須恵器 (Fig. 4-3・4)

3は甕の体部片で、外面に蓆目状のタタキを施し、内面には同心円の当て具痕がみられる。4は高台をもつ壺の底部片と考えられ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整である。

土師質土器 (Fig. 4-6~11)

6は小皿で、底部は平底、体部はやや外弯気味に立ち上がる器形を呈す。手捏ね成形で、内外面ともナデ調整である。7は坏の口縁部片で、内弯気味に立ち上がる器形を呈すが、器表面が剥落しており調整は不明。8~11は鍋の口縁部片で、8のみが直線的に立ち上がる器形を呈し、他の9~11の体部は内弯して立ち上がっている。鐔の断面形をみると、8は三角形状、9は鈍い三角形状、11は台形状をそれぞれ呈している。10の鐔については、口縁部直下外面に下外方に垂下する突帯を有するが、「鐔」の範疇に入れるべきものかどうか定かではない。器表面の調整は8~11すべて内外面ともナデ調整によっており、11のみは体部外面のタタキ調整が観察される。8~11すべての外面の鐔（及び突帯）以下の部分に、煤の付着が顕著に認められる。



(DL = 50.00m)

- 第I層：耕作土
- 第II層：暗灰褐色粘質土
- 第III層：黒褐色粘質土
- 第IV層：明褐色粘質土
- 第V層：黄褐色砂礫土
- (第I層：コンクリート雑壁による掘込)

Fig. 3 基本層序

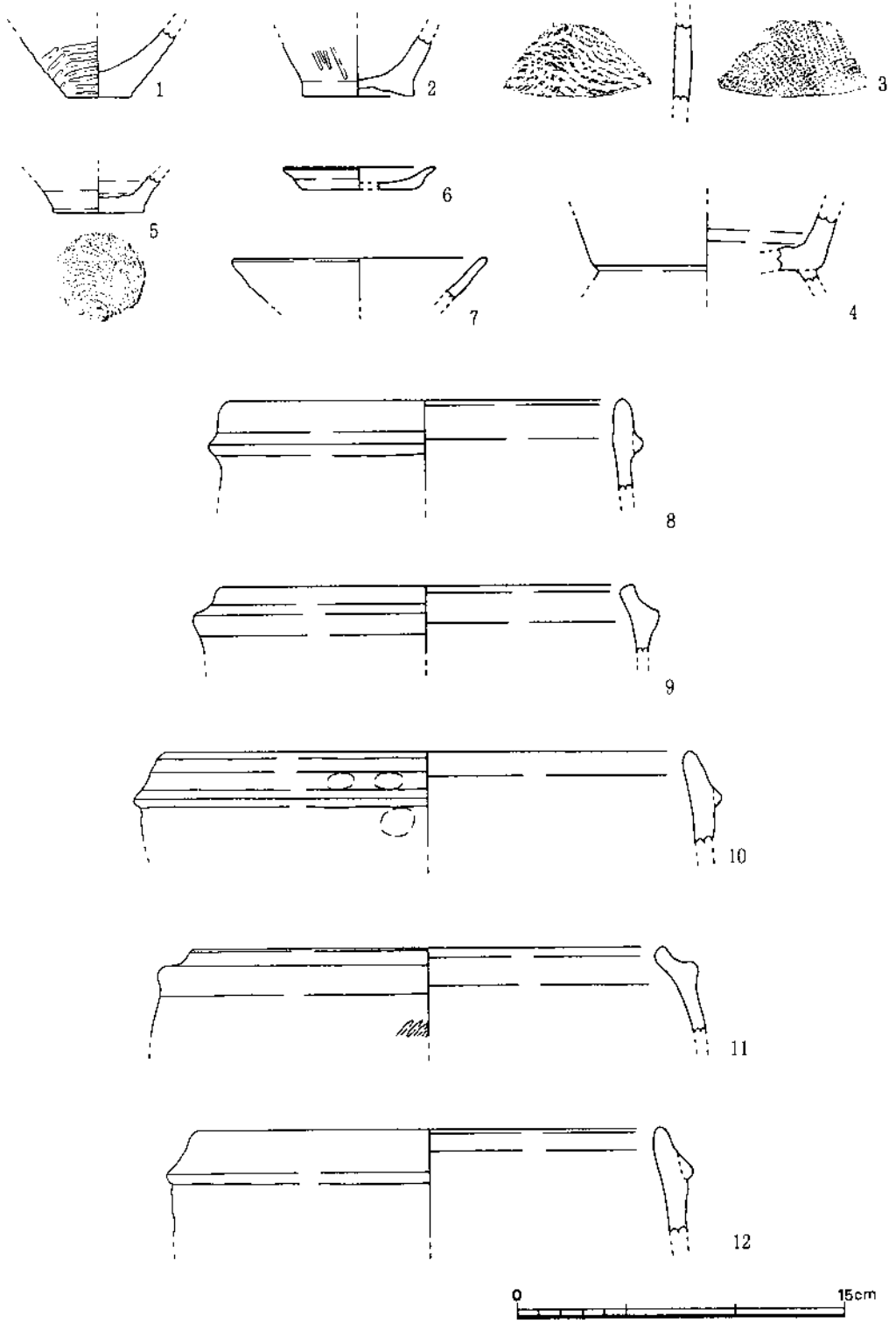


Fig. 4 表採及び第Ⅲ層出土遺物実測図

第IV章 検出の遺構・遺物

今次の調査で検出された遺構のうち、主だったものについて掘立柱建物跡、土坑状遺構、溝状遺構、ピット状遺構の順で、遺構別に記述を行う。遺構出土の遺物についても同時に記述していく。また、個別に記述しなかったピット状遺構の中で、遺物の出土したものについては、表2にまとめた。

今次調査において検出された遺構の総数は、掘立柱建物跡4棟、土坑状遺構11基、溝状遺構4条、ピット状遺構345基であった。遺構の遺存状態は良くなく、また出土遺物も図示できるものはごく僅かで、全体の出土量も少なかった。

1. 掘立柱建物跡

SB1 (Fig. 5)

調査区の北東部で検出された桁行2間(3.42~3.70m)、梁間2間(2.38~2.57m)の東西棟総柱の掘立柱建物跡である。棟方向はN-84°18'-Wであるが、棟に若干の歪みがみられる。柱間寸法は、桁行が1.67~1.98m、梁間が1.11~1.34mとばらつきがある。柱穴の掘り方は円形ないし隅丸方形で、径18~36cm、検出面からの深さは4~12cmを測り、遺構の遺存状態は良くない。底面の標高は49.783~49.860mを測り、南面の桁の柱穴がやや低くなっている。埋土は暗灰褐色粘質土の単層一層であるが、南西隅の1基のみ褐色粘質土の単層一層を埋土とする。遺物は検出されなかった。

SB2 (Fig. 5)

調査区中央部で検出された、長軸方向に4基、短軸方向に2基の柱穴が並ぶ柱穴列で、建物跡とすれば長軸(桁行)3間以上(4.52m以上)、短軸(梁間)1間以上(1.78m以上)の長軸方向が東西に向く掘立柱建物跡である。長軸方向はN-86°36'-Wを示す。柱間寸法は長軸側が1.44~1.58m、短軸側が1.78mである。柱穴の掘り方は円形及び不整形で、径48~69cm、検出面からの深さ5~18cmを測り、遺構の遺存状態は良くない。底面の標高は49.715~49.767mを測り、短軸方向の柱穴が若干低い。埋土は灰黄褐色粘質土の単層一層であり、細かく破碎された土器片を多く含んでいる。

遺物はP4から弥生土器2点、P5から弥生土器6点が出土しているが、すべて図示できない細片であった。

SB3 (Fig. 6)

調査区南西隅で検出された桁行3間以上(4.52m以上)、梁間1間以上(2.44m以上)の南北棟の掘立柱建物跡である。棟方向はN-11°45'-Eで、棟に若干の歪みがみられる。柱間

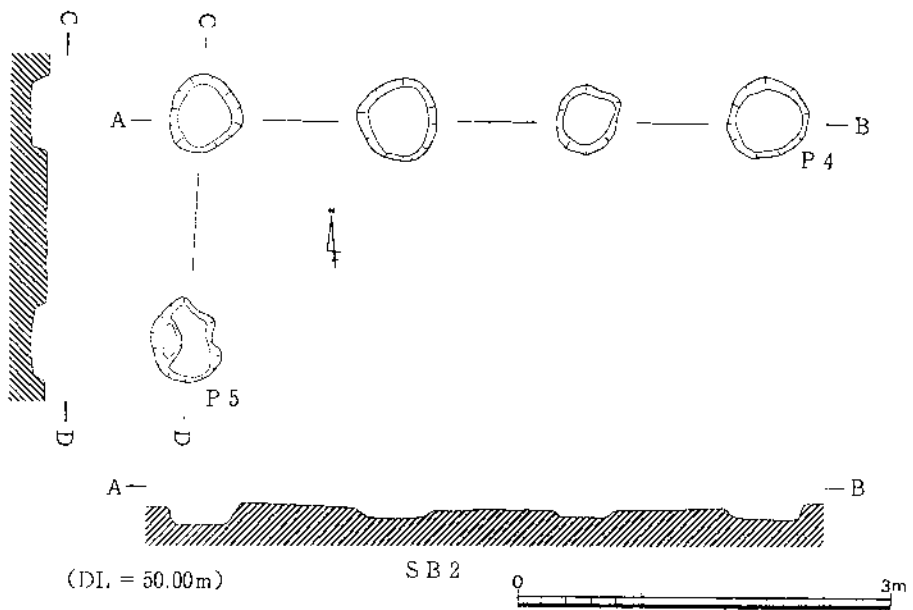
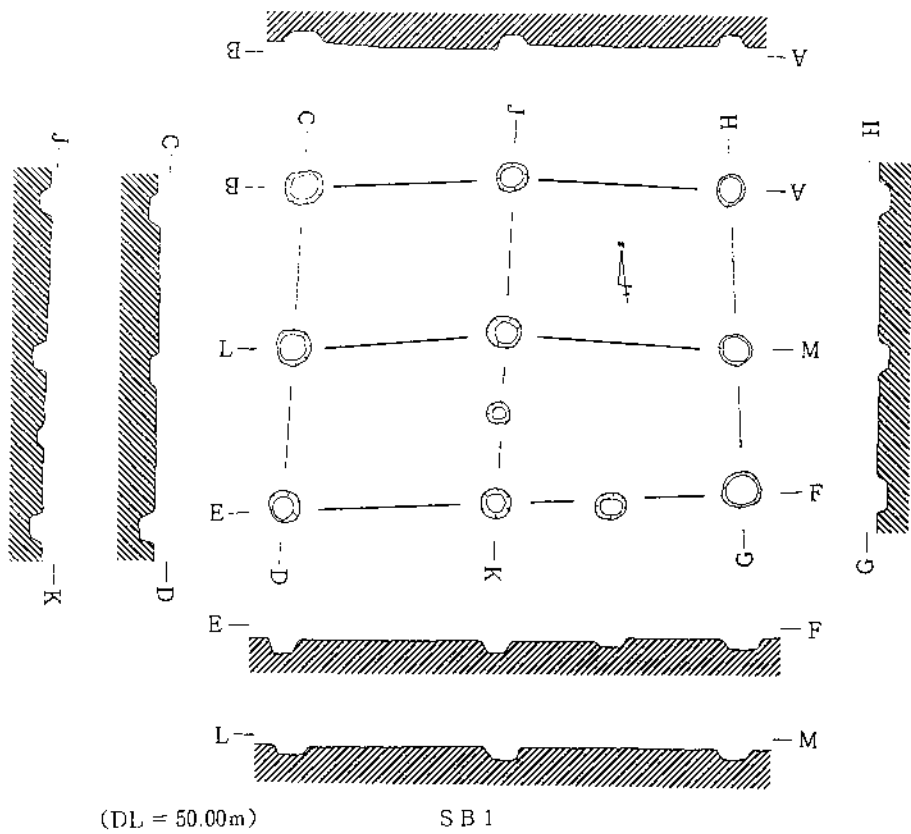


Fig. 5 SB 1 · SB 2

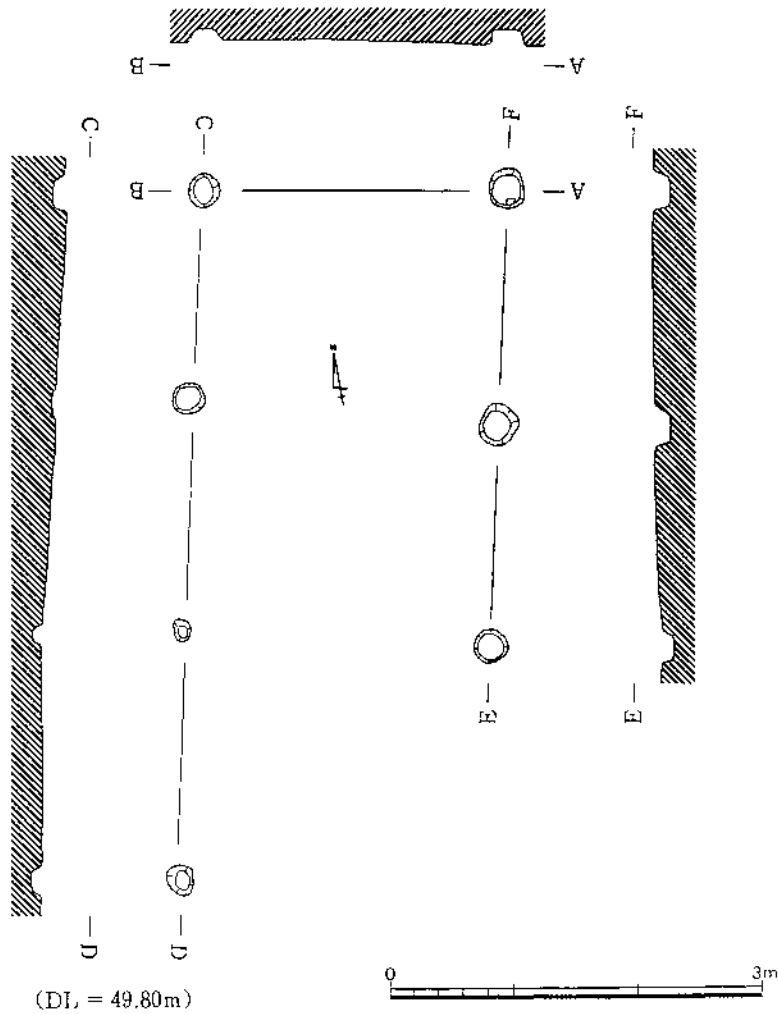


Fig. 6 SB3

寸法は桁行が1.68~1.96m、梁間が2.44mで、ややばらつきがある。柱穴の掘り方は円形ないし隅丸方形で、径13~35cm、深さ3~13cmを測り、遺構の遺存状態は良くない。底面の標高は49.339~49.520mを測り、南方ほど低くなっている。埋土は灰黄褐色粘質土の単層であるが、P4のみ暗黄褐色粘質土の単層を埋土とする。

遺物はP3から弥生土器2点、土師質土器1点、P4から土師質土器3点がそれぞれ出土しているが、すべて図示不可能な細片である。

SB4 (Fig. 7)

調査区ほぼ中央部で検出された桁行4間(7.82m)、梁間2間(3.68~3.73m)の東西棟の掘立柱建物跡である。棟方向はN-79°36'-Wを示す。柱間寸法は桁行が1.70~2.24m、梁間が1.83~1.90mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径18~42、深さ7~24を測り、遺構の遺存

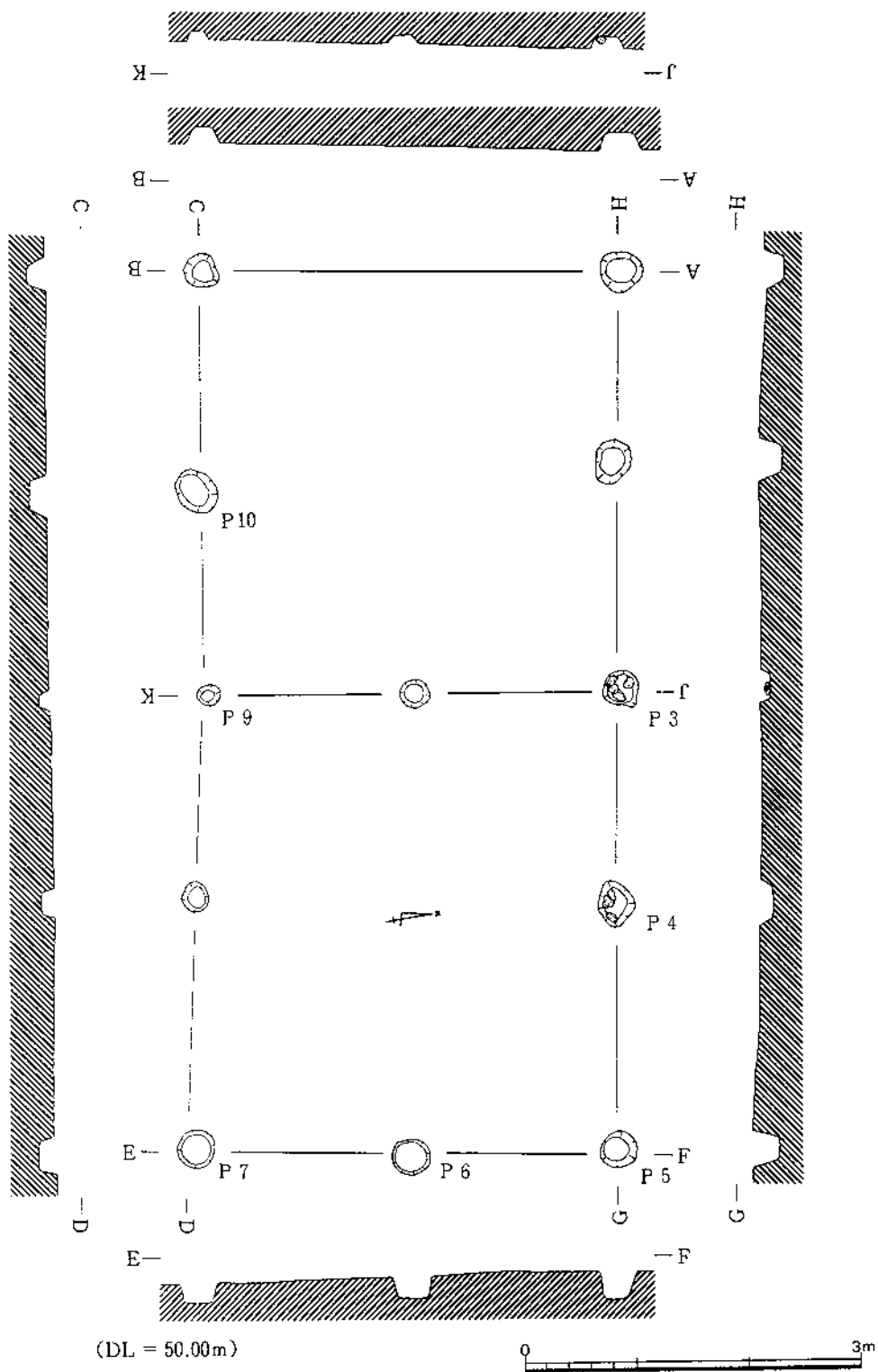


Fig. 7 SB 4

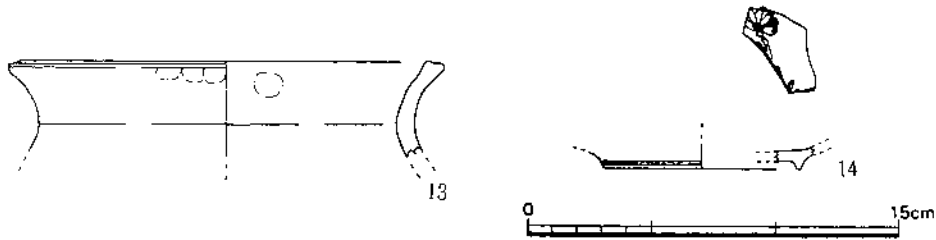


Fig. 8 SB4出土遺物実測図

状態は良くない。底面の標高は49.527~49.689mを測り、南面の桁の柱穴がやや低くなっている。埋土は赤褐色土が混入した褐色粘質土の単統一層であるが、P7・P10の2基は灰黄褐色粘質土の単一層を埋土とする。

遺物はP3・4・5・6・7・9・10から弥生土器、須恵器、土師質土器、染付等が出土しており、P7出土の弥生土器1点とP9出土の染付1点が図示できた。

SB4出土遺物 (Fig. 8-13・14)

13は弥生土器の甕の口縁部片である。緩く屈曲する頸部から口縁部は外弯してのび、口縁端部は凹線状をなす。器表面の調整はナデによっている。14は染付の皿の底部である。底部外面に断面逆台形状の高台を有し、見込には花文、高台外側面には1条の界線を施す。

2. 土坑状遺構

SK1 (Fig. 10)

調査区の北西部、SK6の東側に位置する。掘り方のプランは楕円形を呈し、長径0.87m、短径0.55m、検出面からの深さは18cmを測る。掘り方断面は逆台形を呈し、長軸方向はN-12°48'-Eを示す。埋土は褐色粘質土単統一層である。

遺物は検出されなかった。

SK2 (Fig. 9)

調査区の北西部、SK7の北東に位置する。掘り方のプランは不整形を呈し、長径5.28m、短径1.62m、検出面からの深さは19cmを測る。掘り方断面は北側斜面が緩やかで、南側斜面が急に立ち上がる形状を呈し、長軸方向はN-63°36'-Eを示す。埋土は黒褐色粘質土単統一層である。

遺物は検出されなかった。

SK3 (Fig. 10)

調査区の南西部、SK4の北側に位置する。P67・71・100の3基のピットに切られている。掘り方のプランは隅丸方形を呈し、長径1.88m、短径1.12m、検出面からの深さは14cmを測る。

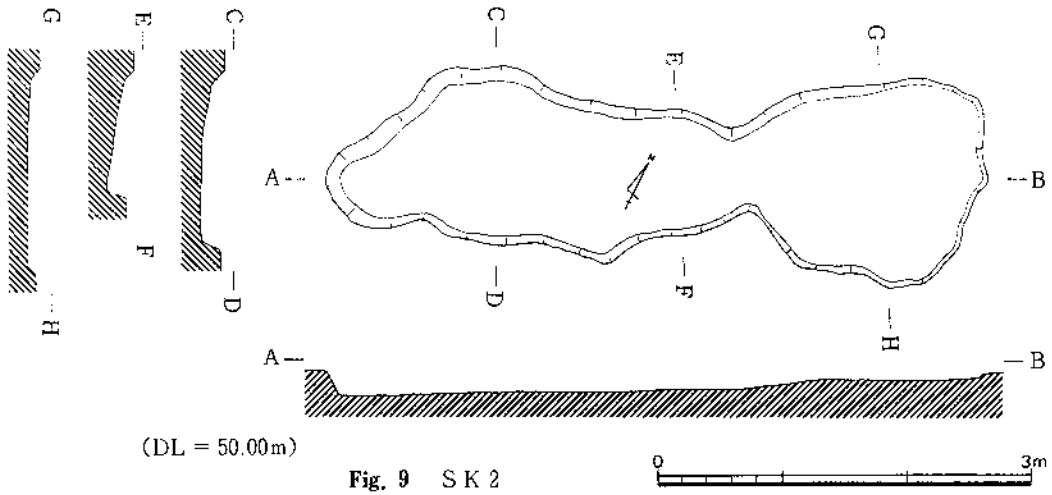


Fig. 9 SK 2

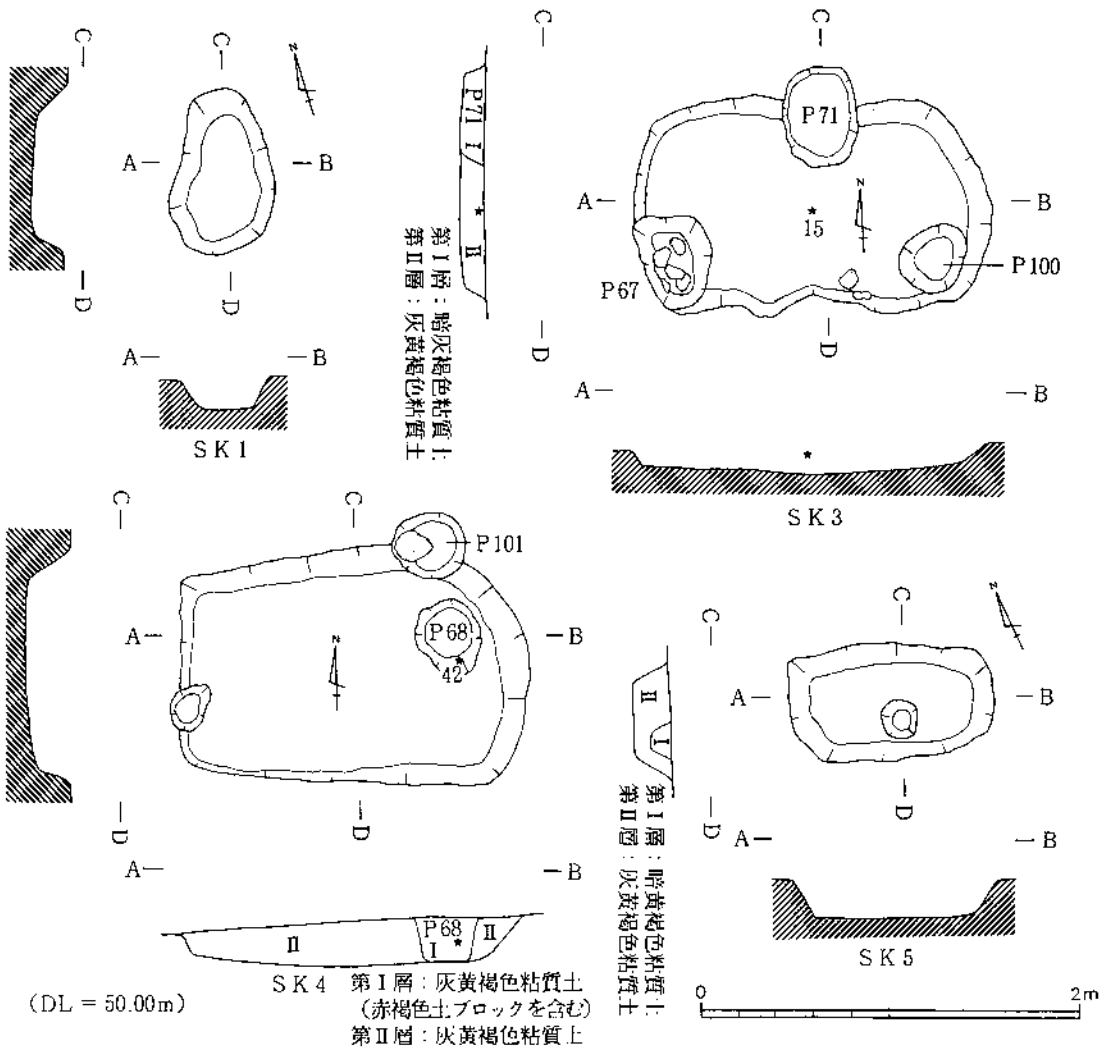


Fig. 10 SK 1・3・4・5

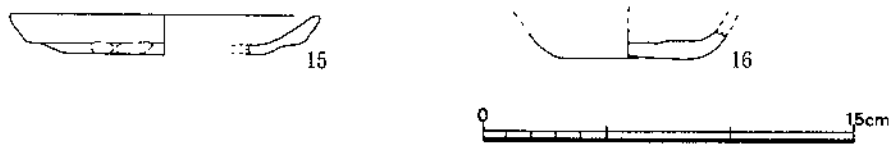


Fig. 11 SK 3・SK 4 出土遺物実測図

掘り方断面は逆台形を呈し、長軸方向はN-85°36'-Wを示す。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層であり、これを切り込んでいるP71の埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物は弥生土器3点、須恵器1点、土師質土器10点等であり、図示できたのは土師質土器1点のみである。またSK3と切り合うP67から土師質土器1点が、P71から弥生土器1点がそれぞれ出土している。

SK 3 出土遺物 (Fig. 11-15)

15は土師質土器の皿で、底部が欠損する。手捏ね成形によるもので、器表面にはナデ調整・指頭押圧を施す。

SK 4 (Fig. 10)

調査区の南西部、SK3の南に位置し、P68・101・102の3基のピットに切られている。P68については別にピットの項で取り上げる。掘り方のプランは不整形を呈し、長径1.81m、短径1.22m、検出面からの深さは23cmを測る。掘り方断面は底面の丸い逆台形を呈し、長軸方向はN-88°06'-Wを示す。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。

出土遺物は弥生土器56点、須恵質土器1点、土師質土器31点等であり、図示できたのは須恵質土器1点のみである。

SK 4 出土遺物 (Fig. 11-16)

16は須恵質の土器の底部片である。底部は平底で、体部は内湾して立ち上がっている。基表面の調整は、外面はナデ調整、内面はロクロによる回転ナデ調整である。

SK 5 (Fig. 10)

調査区の南部、SK4の東に位置し、P104に切られている。掘り方のプランは不整形を呈し、長径1.08m、短径0.60m、検出面からの深さは20cmを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し、長軸方向はN-63°54'-Wを示す。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層であり、これに掘り込まれたP104の埋土は暗黄褐色粘質土である。

出土遺物は弥生土器1点、瓦質土器1点であり、図示できるものはなかった。

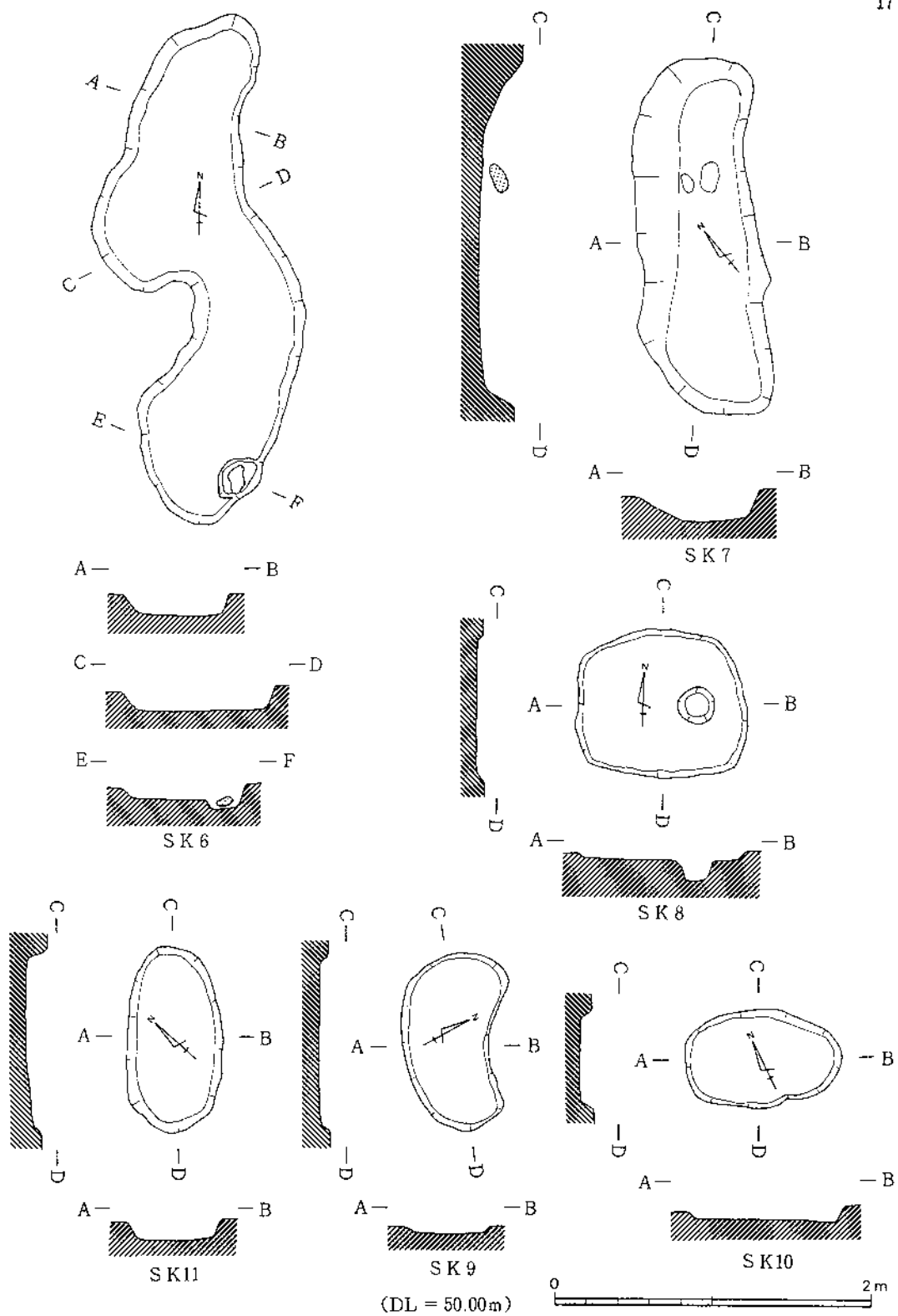


Fig. 12 SK 6 · 7 · 8 · 9 · 10 · 11

SK 6 (Fig. 12)

調査区の北西部、SD 3の東に位置する。掘り方のプランは不整形で、長径3.22 m、短径0.96 m、検出面からの深さは14 cmを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し、南端部にはピット状に一段低い部分がある。長軸方向はN-1° 18' - Eを示す。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。

遺物は検出されなかった。

SK 7 (Fig. 12)

調査区の北西部、SB 2の北に位置する。掘り方のプランは不整の方形で、長径2.20 m、短径0.77 m、検出面からの深さは24 cmを測る。掘り方の断面は船底形を呈し、長軸方向はN-42° 12' - Eを示す。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。

遺物は検出されなかった。

SK 8 (Fig. 12)

調査区の東部、SD 2の南に位置する。掘り方のプランは隅丸方形で、長径1.05 m、短径0.92 m、検出面からの深さ5 cmを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し、長軸方向はN-86° 42' - Eを示す。中央部やや東にピット状の掘り込みがあり、深さは17 cmを測る。埋土は褐色粘質土単純一層である。

遺物は検出されなかった。

SK 9 (Fig. 12)

調査区の東部、SK 10の北東に位置する。掘り方のプランは不整形で、長径1.09 m、短径0.54 m、検出面からの深さは6 cmを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し、長軸方向はN-68° 42' - Wを示す。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。

遺物は検出されなかった。

SK 10 (Fig. 12)

調査区の南東部、SK 9の南西に位置する。掘り方のプランは楕円形で、長径0.98 m、短径0.62 m、検出面からの深さは10 cmを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し、南東部がやや低くなっている。長軸方向はN-65° 42' - Wを示す。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。

遺物は検出されなかった。

SK 11 (Fig. 12)

調査区の南東部に位置する。掘り方のプランは楕円形で、長径1.15 m、短径0.60 m、検出面

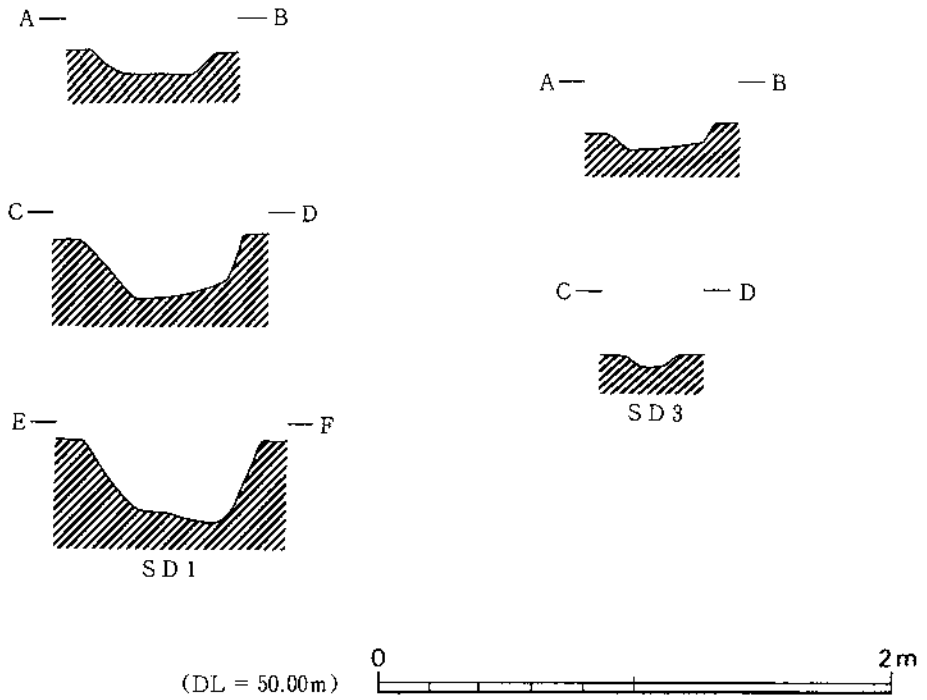


Fig. 13 SD 1 • SD 3

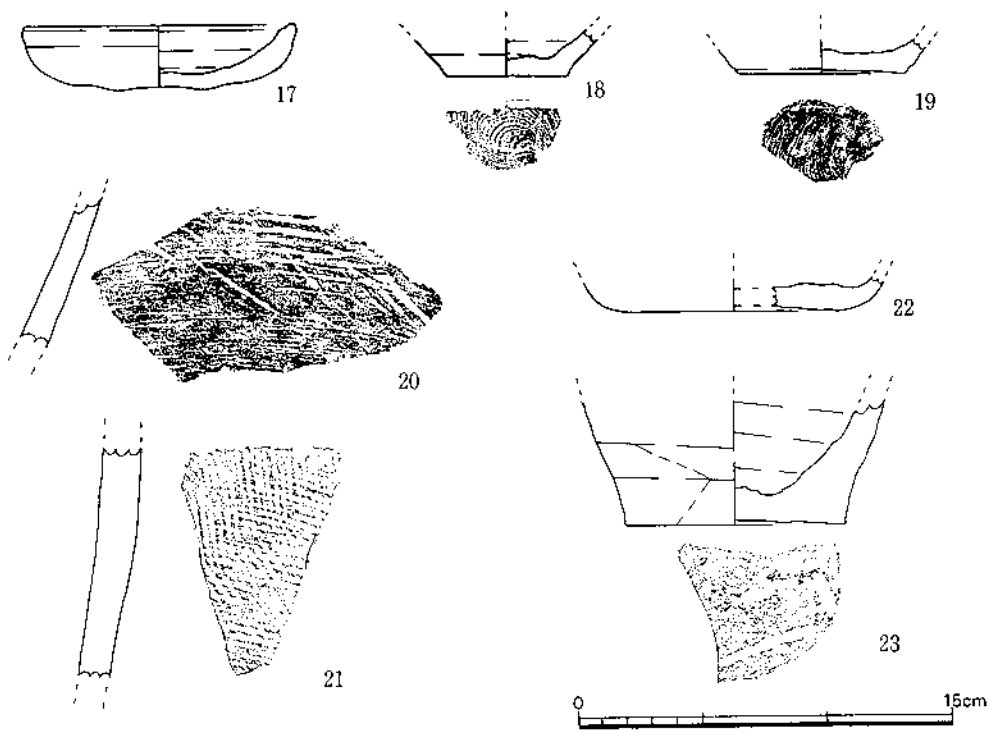


Fig. 14 SD 1 出土遺物実測図 1

からの深さ12cmを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し、長軸方向はN-46°54'-Eを示す。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。

遺物は検出されなかった。

3. 溝状遺構

SD 1 (Fig. 13・付図)

調査区北部に位置する。西端付近で近接するSD 3とはほぼ直交する位置関係にあり、両者が一連のものであった可能性が高い。主軸はN-86°18'-Eを示す。検出した全長は22.08mであり、幅は0.32~1.09mで、東ほど狭くなっている。検出面からの深さは7~31cmで、遺存状態は良くない。掘り方の断面は逆台形を呈し、北側斜面は緩く、南側斜面は急激に立ち上がる。床面東端の標高は49.894m、西端の標高は49.587mを測る。埋土は暗褐色粘質土の単純一層である。

遺物は、弥生土器112点、須恵器2点、須恵質土器1点、土師質土器67点、瓦質土器1点、備前焼4点、青磁1点、近世陶磁器2点等が出土しており、このうち土師質土器10点、須恵質土器2点、備前焼2点を図示することができた。

SD 1 出土遺物 (Fig. 14・15)

土師質土器 (Fig. 14-17~19・Fig. 15-24~30)

17は手握ね成形による皿で、底部は平底に近い丸底を呈し、体部は内弯して立ち上がる。18・19は坏で、ともに底部のみが残存する。いずれもロクロ成形で、底部の切り離しは回転糸切りによっている。24~30は鍋で、すべて口縁部のみが残存している。27・30以外は内弯して立ち上がる体部を有し、口縁端部が面をなすものが多い。(24~26・29) 鏝の断面の形状は、三角形ないし台形であり、30のみが形状の異なる下垂する突帯を有する。器表面の調整は、外面がタタキ及びナデ調整、内面がナデ調整であり、外面には例外なく煤の付着が観察される。

須恵質土器 (Fig. 14-20・21)

20・21ともに体部片で、器表面の調整は、外面がタタキ調整、内面がナデ調整である。

備前焼 (Fig. 14-22・23)

22は底部片で器形は不明。内外面ともナデ調整を施している。23は壺の底部片である。底部は平底で、体部は内弯気味に立ち上がっている。器表面の調整は、外面がヘラケズリ・ナデ調整、内面は回転ナデ調整であり、底外面に植物茎部の圧痕がみられる。

SD 3 (Fig. 13・付図)

調査区北西部に位置する。主軸はN-13°42'-Eを示し、SD 1とは直交する位置関係にある。検出した全長は9.67m、幅は0.20~0.50mを測る。検出面からの深さは5~10cmで、遺存状態は良くない。掘り方の断面は逆台形を呈し、床面北端の標高は49.754m、南端の標高は

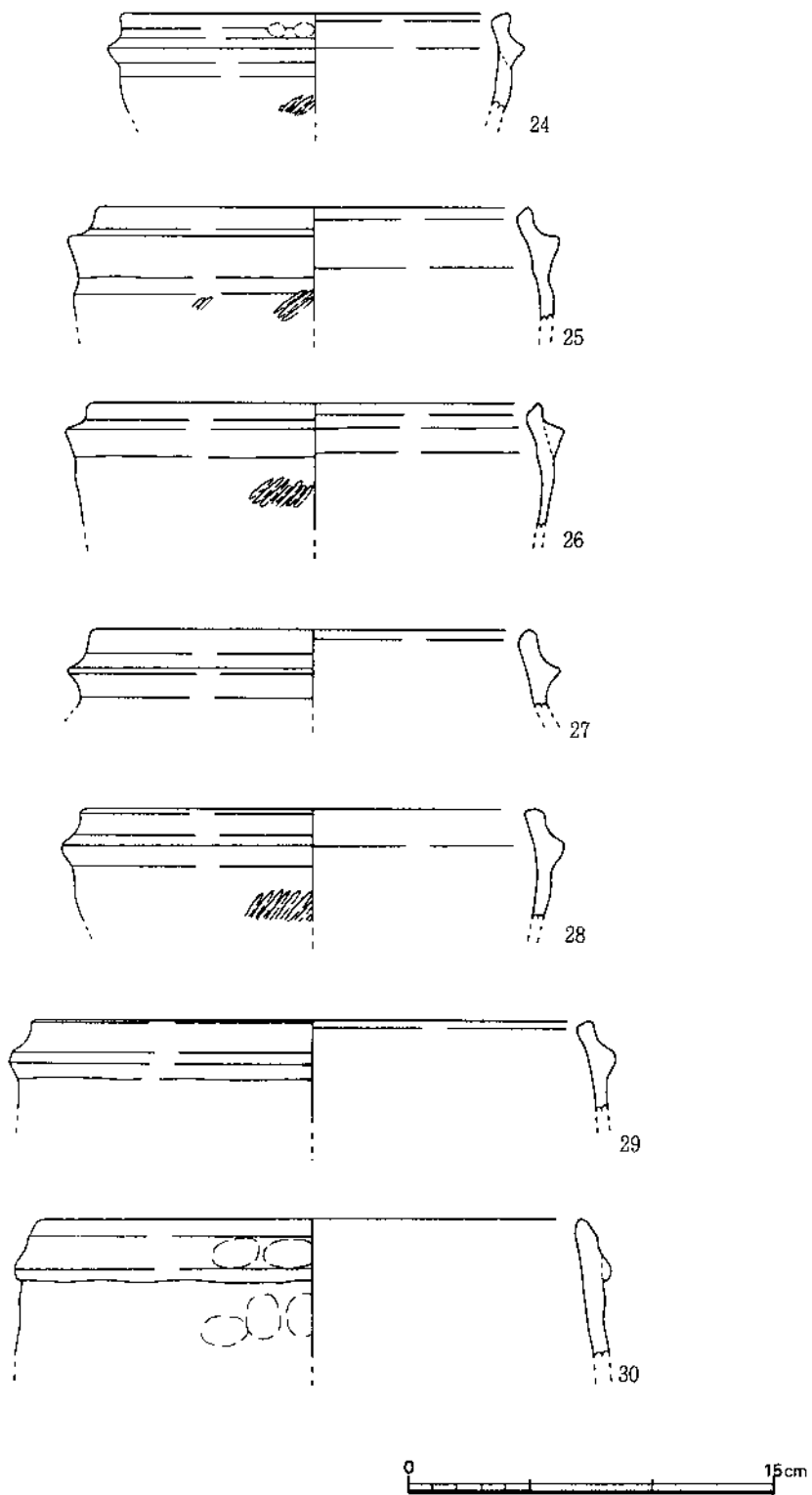


Fig. 15 SD 1 出土遺物実測図 2

49.708mを測る。埋土は暗褐色粘質土の単純一層である。

出土遺物は、弥生土器9点、土師質土器8点が挙げられるが、図示できるものはなかった。

SD2・SD4（付図）

調査区北東隅及び南西隅から中央部に向かって広がり、調査区中央部で相近接する。ともに明確な掘り方をもたない自然の窪地状を呈すもので、遺構とは捉え難い。便宜上SD2・SD4と呼び分けたが、本来同一の性格のものともて大過ないと考えられる。検出面からの深さは8～22cmを測り、底面の標高は北東部で49.652m、南西部で49.305mとなっている。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。

出土遺物は、弥生土器70点、土師質土器15点等が挙げられるが、細片ばかりで図示できるものはなかった。

4. ピット状遺構

P3（Fig. 16）

調査区北西部で検出した隅丸方形のピット状遺構で、長径38cm、検出面からの深さ18cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。出土遺物は弥生土器4点が挙げられ、このうちの1点が図示できた。

P3 出土遺物（Fig. 17-34）

34は弥生土器の甕の底部片で、明瞭な平底を呈す。器表面の調整は、外面がタタキ調整、内面がナデ調整によっており、底外面には植物茎部の圧痕がみられる。

P8（Fig. 16）

調査区北西部で検出した円形のピット状遺構で、径34cm、検出面からの深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。出土遺物は弥生土器6点が挙げられ、このうちの1点が図示できた。

P8 出土遺物（Fig. 17-33）

33は弥生土器の甕であり、体部下半は欠損する。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外上方に直線的にのびる。器表面の調整は、体部外面がハケ調整、内面がヘラケズリ・ナデ調整によっている。

P11（Fig. 16）

調査区北西部で検出した隅丸方形のピット状遺構で、長径42cm、検出面からの深さ17cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。出土遺物は弥生土器18点、土師質土器2点が挙げられ、弥生土器1点が図示できた。

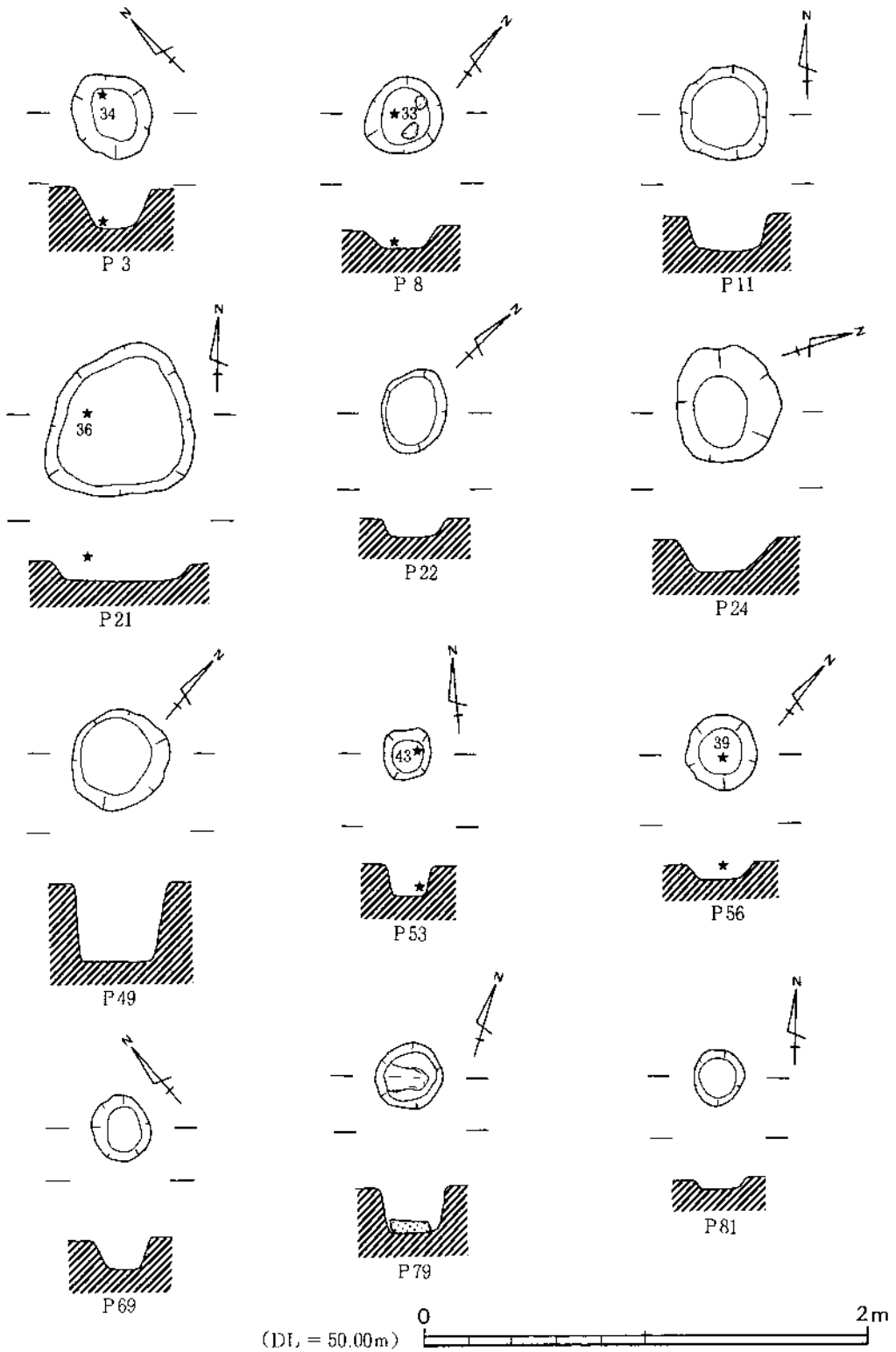


Fig. 16 P 3 • 8 • 11 • 21 • 22 • 24 • 49 • 53 • 56 • 69 • 79 • 81

P11出土遺物 (Fig. 17-31)

31は弥生土器の甕の口縁部片である。口縁部は外弯気味に外上方にのび、端部は上方に僅かに拡張し、外面に凹線2条を巡らす。器表面の調整は、内外面ともナデ調整によっている。

P21 (Fig. 16)

調査区中央部で検出した不整形のピット状遺構で、長径70cm、検出面からの深さは9cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土単純一層である。出土遺物は図示した弥生土器1点のみであった。

P21出土遺物 (Fig. 17-36)

36は弥生土器の鉢で、平底の底部が残存する。器表面の調整は、摩滅が著しいため指頭圧痕のみ観察される。

P22 (Fig. 16)

調査区中央部で検出した楕円形のピット状遺構で、長径36cm、検出面からの深さは9cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。出土遺物は土師質土器5点が挙げられ、このうちの1点が図示できた。

P22出土遺物 (Fig. 17-37)

37は土師質土器の坏で、口縁部のみ残存する。ロクロ成形によっており、内外面にロクロによるナデ調整が施されている。

P24 (Fig. 16)

調査区西部で検出した楕円形のピット状遺構で、長径53cm、検出面からの深さ15cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。出土遺物は図示した弥生土器1点のみであった。

P24出土遺物 (Fig. 17-35)

35は弥生土器の鉢で底部のみ残存する。底部は上げ底状を呈し、器表面の調整は外面がハケ調整、内面がナデ調整によっている。

P49 (Fig. 16)

調査区中央部付近で検出した円形のピット状遺構で、径45cm、検出面からの深さは35cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。出土遺物は弥生土器3点、土師質土器4点、備前焼1点等が挙げられ、土師質土器1点が図示できた。

P49出土遺物 (Fig. 17-38)

38は土師質土器の皿で、底部は欠損する。手捏ね成形で、器表面の調整は内外面ともナデ調整によっている。

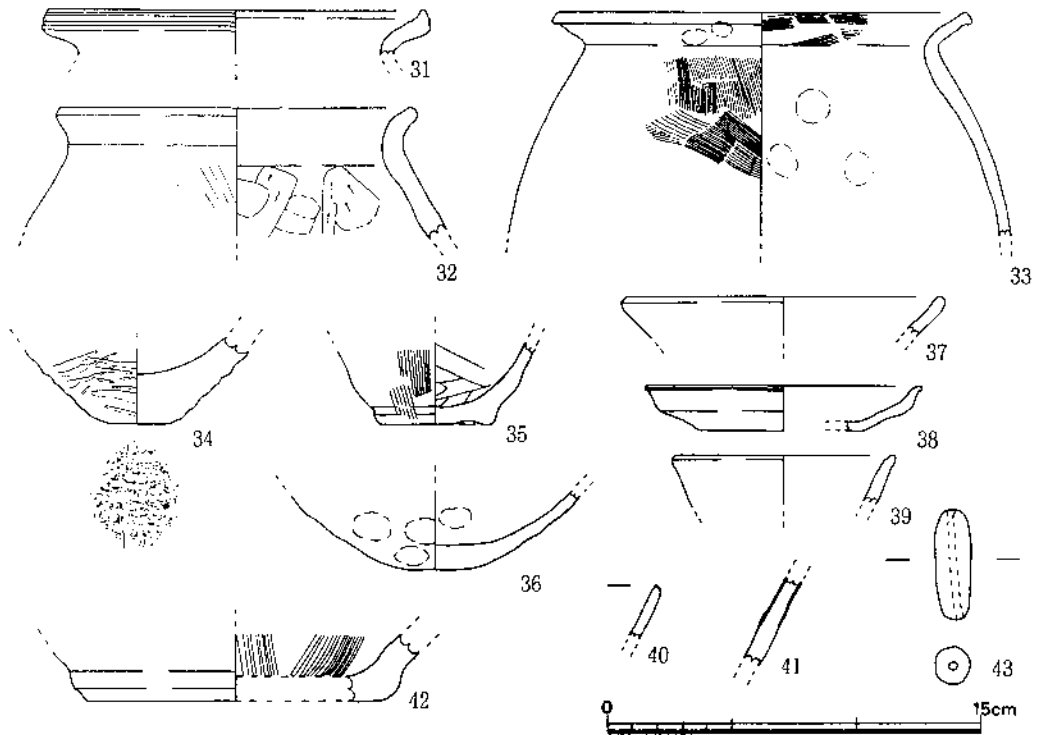


Fig. 17 ピット状遺構出土遺物実測図

P53 (Fig. 16)

調査区南半部で検出した隅丸方形のピット状遺構で、径22cm、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は赤褐色土をブロック状に含む褐色粘質土単純一層である。出土遺物は、弥生土器3点、土師質土器1点、土錘1点が挙げられ、土錘1点が図示できた。

P53出土遺物 (Fig. 17-43)

43は土師質の土錘で、楕円形を呈し、ほぼ完形である。

P56 (Fig. 16)

調査区中央部で検出した円形のピット状遺構で、径34cm、検出面からの深さは8cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土単純一層である。出土遺物は、弥生土器1点、土師質土器8点が挙げられ、土師質土器1点が図示できた。

P56出土遺物 (Fig. 17-39)

39は土師質土器の坏で、口縁部のみ残存する。ロクロ成形で、器表面の調整は内外面ともナデ調整によっている。

P68 (Fig. 10)

調査区南西部で、SK4の埋土に掘り込まれた不整形のピット状遺構で、長径38cm、検出面

からの深さは19cmを測る。埋土は赤褐色土を含む灰黄褐色粘質土単純一層である。出土遺物は弥生土器3点、土師質土器12点、備前焼1点等が挙げられ、備前焼1点が図示できた。

P68出土遺物 (Fig. 17-42)

42は備前焼の播鉢で、底部のみ残存する。器表面の調整は外面がナデ調整によっており、内面はナデ調整の後、縦～斜め方向の条線を施している。

P69 (Fig. 16)

調査区南西部で検出した円形のピット状遺構で、径30cm、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。出土遺物は土師質土器2点が挙げられ、このうち1点が図示できた。

P69出土遺物 (Fig. 17-40)

40は土師質土器の坏であり、口縁部のみ残存する。ロクロ成形で、器表面の調整はナデ調整によっている。

P79 (Fig. 16)

調査区南半部で検出した円形のピット状遺構で、径30cm、検出面からの深さは20cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。出土遺物は弥生土器3点、土師質土器5点、瀬戸焼1点が挙げられ、瀬戸焼1点が図示できた。

P79出土遺物 (Fig. 17-41)

41は瀬戸焼の体部片で、内外面とも浅黄橙色に施釉している。

P81 (Fig. 16)

調査区南半部で検出した円形のピット状遺構で、径25cm、検出面からの深さは5cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土単純一層である。出土遺物は弥生土器8点が挙げられ、このうち1点が図示できた。

P81出土遺物 (Fig. 17-32)

32は弥生土器の甕で、口縁部が残存する。器表面の調整は外面がハケ調整、内面がヘラケズリ及びナデ調整によっている。

表2 ピット状遺構計測表

ピット No	平面形	径 (m)	深さ(m)	出土遺物	ピット No	平面形	径 (m)	深さ(m)	出土遺物
1	楕円形	0.46×0.35	0.23	弥生土器	49	円形	0.45×0.44	0.35	弥生土器、土師質土器、甕
2	不整形	0.28×0.26	0.20	弥生土器、土師質土器	50	不整形	0.23	0.08	土師質土器
3	隅丸方形	0.38×0.36	0.18	弥生土器	51	楕円形	0.27×0.22	0.13	弥生土器
4	不整形	0.79×0.48	0.23	”、須恵質土器	52	隅丸方形	0.22×0.18	0.12	”
5	楕円形	0.48×0.39	0.19	”	53	”	0.22×0.21	0.14	”、土師質土器、土
6	不整形	0.33×0.27	0.12	”	54	不整形	0.40×0.35	0.14	”
7	”	0.55×0.32	0.21	”、土師質土器	55	楕円形	0.28×0.25	0.19	”
8	円形	0.34	0.11	”	56	円形	0.34×0.32	0.08	”、土師質土器
9	”	0.28×0.26	0.13	”	57	”	0.19×0.18	0.14	土師質土器
10	不整形	0.51×0.29	0.20	”	58	楕円形	0.42×0.34	0.08	”
11	隅丸方形	0.42×0.38	0.17	”、土師質土器	59	円形	0.31×0.28	0.11	弥生土器
12	円形	0.52×0.49	0.14	”	60	楕円形	0.40×0.33	0.18	土師質土器
13	楕円形	0.51×0.39	0.24	”	61	不整形	0.40×0.39	0.12	”
14	不整形	0.37×0.35	0.13	”	62	楕円形	0.28×0.23	0.09	弥生土器
15	隅丸方形	0.35×0.30	0.13	土師質土器	63	”	0.33×0.31	0.06	”
16	楕円形	0.34×0.29	0.20	弥生土器	64	”	0.31×0.25	0.11	土師質土器
17	円形	0.26×0.24	0.12	”	65	”	0.30×0.26	0.18	弥生土器、土師質土器
18	楕円形	0.32×0.27	0.13	土師質土器	66	”	0.27×0.24	0.12	土師質土器
19	不整形	0.36×0.20	0.10	”	67	不整形	0.48×0.37	0.20	”
20	楕円形	0.43×0.28	0.20	弥生土器	68	”	0.38×0.33	0.19	弥生土器、土師質土器、甕
21	不整形	0.70×0.62	0.09	”	69	円形	0.30×0.26	0.14	土師質土器
22	楕円形	0.36×0.29	0.09	土師質土器	70	隅丸方形	0.30	0.19	”
23	”	0.32×0.28	0.11	弥生土器	71	楕円形	0.52×0.39	0.13	弥生土器
24	”	0.53×0.48	0.15	”	72	不整形	0.33×0.30	0.13	土師質土器
25	”	0.31×0.27	0.17	”	73	楕円形	0.75×0.58	0.17	”
26	”	0.40×0.24	0.15	”、土師質土器	75	不整形	0.22×0.20	0.15	”
27	”	0.32×0.30	0.16	”	76	”	0.30×0.28	0.17	”
28	”	0.26×0.23	0.09	”	77	”	0.43×0.36	0.21	弥生土器、土師質土器
29	不整形	0.34×0.30	0.26	土師質土器	78	”	0.44×0.38	0.17	弥生土器
30	円形	0.40×0.39	0.20	弥生土器	79	円形	0.30	0.20	”、土師質土器、甕
31	楕円形	0.34×0.28	0.11	”	80	隅丸方形	0.20×0.18	0.05	土師質土器
32	不整形	0.29×0.26	0.12	”	81	円形	0.25×0.22	0.05	弥生土器
33	円形	0.27	0.10	土師質土器	82	隅丸方形	0.30×0.29	0.15	”
34	楕円形	0.27×0.24	0.12	”	83	楕円形	0.41×0.35	0.27	”、土師質土器
35	”	0.60×0.32	0.06	弥生土器、土師質土器	84	”	0.44×0.38	0.25	土師質土器
36	不整形	0.46×0.44	0.27	”	85	隅丸方形	0.23×0.22	0.21	”
37	隅丸方形	0.45×0.42	0.11	”	86	”	0.47×0.46	0.28	弥生土器、土師質土器
38	不整形	0.52×0.46	0.10	弥生土器	87	”	0.20	0.25	”
39	隅丸方形	0.26	0.13	”、土師質土器	88	楕円形	0.54×0.48	0.21	土師質土器
40	不整形	0.30×0.24	0.08	”	89	”	0.35×0.26	0.18	”
41	”	0.32×0.28	0.08	”、土師質土器	90	不整形	0.30×0.28	0.18	炭化木片
42	円形	0.60	0.15	”	91	楕円形	0.23	0.24	弥生土器
43	”	0.21×0.18	0.14	”	92	不整形	0.26×0.24	0.20	近世陶器
44	不整形	0.44×0.40	0.16	”	93	楕円形	0.35×0.33	0.30	土師質土器
45	”	0.33×0.30	0.15	”、土師質土器	94	隅丸方形	0.35×0.30	0.16	弥生土器
46	”	0.51×0.45	0.13	”	95	不整形	0.35×0.30	0.23	”、土師質土器
47	”	0.20×0.18	0.28	”	96	楕円形	0.40×0.38	0.24	土師質土器、瓦質土器
48	楕円形	0.28×0.26	0.23	”、備前焼	97	円形	0.25	0.18	弥生土器

第V章 総 括

今次調査は、平成元年度調査地点⁹¹とは若干の距離をおくものの、ひびのき遺跡群の弥生集落の広がりを示す、竪穴住居址等の遺構群の検出が期待されていた。しかし、明確な弥生時代の遺構はピット状遺構40基を数えるのみで、「ひびのき弥生集落」の西端付近に相当するものと考えられる。出土遺物も細片が多く、実測に堪え得るものはごく少量であった。一方、中世の遺構は、掘立柱建物跡4棟、土坑状遺構3基、溝状遺構2条、ピット状遺構55基で、弥生時代に位置付けられる遺構群よりもはるかに充実しており、今次調査地点の主体をなしているといえよう。しかし、出土遺物はやはり細片が多く、完形に復元できるものはみられなかった。以下、各時代の遺構・遺物等について若干の所見を綴り、まとめとする。

(1) 弥生時代の遺構・遺物について

弥生時代の遺物のみを純粹に出土した遺構は、前述したピット状遺構P3・8・21・24・81と、表2に示したものを合わせた40基である。建物跡等として復元できるものはなく、集落の中心部とは捉え難いため、集落内の空間部分、あるいは周辺部分に相当すると考えられる。

出土遺物は弥生土器657点を数えるが、細片が殆どである。表採の鉢2、及びP24出土の鉢35により、遺跡の存続期間の上限は弥生後期中葉、P3出土の甕34によりその下限は弥生後期終末と考えられよう。⁹²

(2) 中世の遺構・遺物について

中世の遺構は、掘立柱建物跡4棟、土坑状遺構3基、溝状遺構2条、ピット状遺構55基がある。掘立柱建物跡4棟は、棟方向が東西と考えられるもの3棟と棟方向が南北のもの1棟からなり、棟方向には何らかの規制が窺われる。また、調査区北部で検出した溝状遺構SD1が東西方向の区画を意識しているとすれば、掘立柱建物群の棟方向と更に有機的なつながりをもつことが指摘でき、遺跡の北東に聳える楠目城跡との関連を論ずる際の有益な視点となろう。なお、同様の地割に関与したと考えられる溝状遺構は、平成元年度調査区(SD10-A・17・18)⁹³、及び遺跡に南接する大塚遺跡(SD31・32・34)⁹⁴でも検出されており、ひびのき遺跡群全体の中で捉えなおす必要があると考える。今後の課題としたい。なお、全体に弥生時代の遺物を混入する遺構が多く、中世の集落が占地するに当たって、弥生時代の遺構及び遺物包含層を数多く破壊した過程が推察される。

出土遺物は、土師質土器が圧倒的に多く360点を数え、その他に青磁、染付、備前焼、瀬戸焼、須恵質土器、土錘等が少量検出されたが、いずれも細片ばかりで、図示できたのはごく僅かであった。出土量の多いのは土師質土器の鍋であり、12点を図示することができたが、これらは鏝の形態によって2形態への分類が可能である。すなわち、断面形が台形ないし三角形を

呈し、明確な突出を示すものと、下垂する突帯状を呈するものであり、前者には8、9、11、24～29、後者には10、12、30がそれぞれ該当する。SD1の埋土中から両形態の口縁部片が出土しており、並行関係を示すものと捉えられるが、全形の明らかとなる個体はみられない。なお、断面形が三角形の鏝を有する鍋については、「田村遺跡群」の編年⁵⁾によって15世紀後半という年代が与えられており、これと並行するものと考えられる。

註

- (1) 高橋啓明 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』 土佐山田町教育委員会 1990年
- (2) 出原恵三 「土佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』 古代学協会 四国支部第4回大会発表資料 1990年
- (3) 同註(1)
- (4) 山本哲也・曾我貴行 『大塚遺跡発掘調査報告書』 土佐山田町教育委員会 1991年
- (5) 松田直則 「中～近世小結 1. 出土遺物」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』 第10分冊 高知県教育委員会 1986年

表3 遺物観察表 1

挿図番号	遺構番号	器種	口縁径 (cm)	器高 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig. 4 -1	表採	弥生土器 甕	— (2.8) —	— — 3.0	底部のみ残存。底部は平底で、 体部は内湾ぎみに外上方に立ち 上がる。	外面はタタキ、内面はナデ調整。	
" -2	"	" 鉢	— (2.8) —	— — 5.0	底部のみ残存。底部は上げ底状 を呈し、体部は直線的に外上方 に立ち上がる。	外面はタタキ、内面はナデ調整。 底部外面はナデ・指頭押圧を施 す。	
" -3	"	須恵器 甕	— — —	— — —	体部片である。	外面には磨目状のタタキを施し、 内面には同心円の当て具痕がみ られる。	
" -4	"	" 壺	— (3.2) —	— — —	底部のみ残存。体部は直線的に 外上方に立ち上がる。底部外面 端に下方にのびる高台がつく が、先端部は欠損。	外面は回転ヘラケズリ・ナデ調 整。内面は回転ナデ調整。	ロクロ回転方 向は右回り。
" -5	第三層	土師質土器 杯	— (1.7) —	— — 4.0	底部のみ残存。底部は平底で、 体部は外湾ぎみに外上方に立ち 上がる。	ロクロ形成。内外面ともロクロ によるナデ調整。底部切り離し は回転糸切りによる。	"
" -6	表採	" 小皿	6.6 1.0 — 5.0	— — —	底部は平底で、体部はやや外湾 ぎみに外上方に立ち上がり、口 縁端部は丸くおさめる。	手づくね成形。内外面ともナデ 調整。	
" -7	"	" 杯	11.6 (2.0) —	— — —	口縁部のみ残存。体部はやや内 湾ぎみに外上方に立ち上がり、 口縁端部は丸くおさめる。	器表面が剥落しており、調整は 不明。	
" -8	"	" 鍋	— (4.2) —	— — —	口縁部のみ残存。ほぼ直線的に 上方に立ち上がり、口縁端部は 丸くおさめる。口縁部直下外面 に、断面が鈍い三角形状を呈す 銹を有する。	内外面ともナデ調整。	外面、銹以下 の部分に煤が 付着。
" -9	"	" "	— (3.1) —	— — —	口縁部のみ残存。体部は内湾し て上内方に立ち上がり、口縁端 部は丸くおさめる。口縁部直下 外面に断面三角形状の銹を有す る。	"	"
" -10	"	" "	— (4.3) —	— — —	口縁部のみ残存。体部は内湾し て上内方に立ち上がり、口縁端 部は丸くおさめる。口縁部直下 外面に下垂する銹状の突帯を有 する。	"	外面、突帯以 下の部分に煤 の付着顕著。
" -11	"	" "	— (4.0) —	— — —	口縁部のみ残存。体部は内湾し て上内方に立ち上がり、口縁端 部は面をなす。口縁部直下外面 に、断面台形状の銹を有する。	体部外面はタタキ調整、その他 の部位は内外面ともナデ調整。	外面、銹以下 の部分に煤の 付着顕著。
" -12	第三層	" "	— (4.9) —	— — —	口縁部のみ残存。体部は内湾し て上内方に立ち上がり、口縁端 部は丸くおさめる。口縁部直下 外面に、下垂する銹状の突帯 を有する。	内外面ともナデ調整。	外面に煤の付 着顕著。
Fig. 8 -13	SB 4	弥生土器 甕	— (3.9) —	— — —	口縁部のみ残存。頸部は軽く屈 曲し、口縁部は外湾して外上方 に立ち上がり、端部は内外面に やや肥厚し、端面は凹線状を呈 す。	内外面とも、横方向のナデ調整 を施し、口縁部には内外面とも に指頭正痕がみられる。	
" -14	"	染付 皿	— (1.0) — 8.0	— — —	底部のみ残存。底部外面端に、 真直ぐに下方にのびる、断面台 形状の高台を有する。	見込には花文、高台外側面には 1条の界線を施す。髷付・底面 中央部分は無釉。	白色釉。
Fig. 11 -15	SK 3	土師質土器 皿	— 12.4 1.6 —	— — —	体部は内湾して外上方に立ち上 がり、口縁端部は丸くおさめる。	手づくね成形。外面はナデ・指 頭押圧を施す。内面は調整不明。	

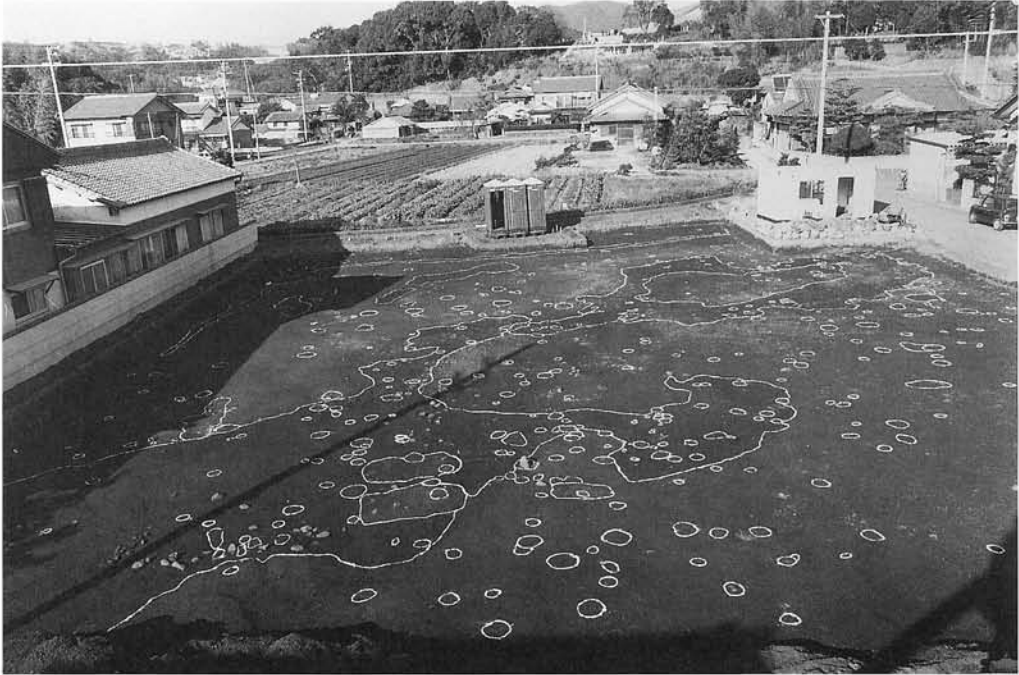
表3 遺物観察表 2

挿図番号	遺構番号	器種	法重 (ca)	形態・文様	手法	備考
Fig. 11 -16	S K 4	須恵質土器	— (1.2) — 6.0	底部のみ残存。底部は平底で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	外面はナデ、内面は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右回り。
Fig. 14 -17	S D 1	土師質土器 皿	11.0 2.5 — 6.0	底部は平底を指向した丸底で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	手づくね成形。内面はナデ調整。外面は調整不明。	
" -18	"	" 杯	— (1.5) — 4.9	底部のみ残存。底部は平底で、体部は直線的に外上方に立ち上がる。	ロクロ成形。内外面ともロクロによるナデ調整。底部切り離しは回転糸切りによる。	ロクロ回転方向は右回り。
" -19	"	" "	— (1.4) — 6.6	底部のみ残存。底部は平底で、体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	ロクロ成形。内外面ともロクロによるナデ調整。底部切り離しは回転糸切りによる。	"
" -20	"	須恵質土器	— (6.4) —	体部片である。	外面はタタキ・ナデ、内面はナデ調整。	
" -21	"	" 甕	— (9.4) —	"	外面はタタキ、内面はナデ調整。	
" -22	"	備前焼	— (1.3) — 9.0	底部のみ残存。底部は平底で、体部は緩やかに内湾して立ち上がる。	内外面ともロクロによるナデ調整。	
" -23	"	" 壺	— (5.0) — 8.8	底部のみ残存。底部は平底で、体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	外面はヘラケズリ・ナデ、内面は回転ナデ調整。底外面には植物茎部の圧痕がみられる。	
Fig. 15 -24	"	土師質土器 鍋	15.8 (4.1) —	口縁部が残存。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は外傾する面をなす。口縁部直下外面に、断面三角形の鑿を有する。	体部外面はタタキ、他の外面及び内面はナデ・指頭押圧を施す。	外面に煤が付着。
" -25	"	" "	17.6 (4.7) —	口縁部が残存。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は外傾する面をなす。口縁部直下外面に、断面不整三角形の鑿を有する。	体部外面はタタキ、他の外面及び内面はナデ調整。	外面、鑿以下の部分に煤の付着顕著。
" -26	"	" "	18.4 (5.2) —	口縁部が残存。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は外傾する面をなす。口縁部直下外面に、断面三角形の鑿を有する。	"	"
" -27	"	" "	18.0 (3.2) —	口縁部のみ残存。端部は外傾する面をなす。口縁部直下外面に、断面三角形の鑿を有する。	内外面ともナデ調整。	"
" -28	"	" "	19.0 (4.6) —	口縁部が残存。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は、内側は尖り、外側は丸くおさめる。口縁部直下外面に、断面三角形の鑿を有する。	体部外面はタタキ、他の外面及び内面はナデ調整。	外面に煤が付着。
" -29	"	" "	23.0 (4.2) —	口縁部が残存。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は外傾する面をなす。口縁部直下外面に、断面台形状の鑿を有する。	内外面ともナデ調整。	外面、鑿以下の部分に煤の付着顕著。
" -30	"	" "	22.0 (5.7) —	口縁部が残存。体部は内傾して直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部直下外面に、下垂する鑿状の尖帯を有する。	外面は指頭押圧・ナデ、内面はナデ調整。	外面に煤の付着顕著。

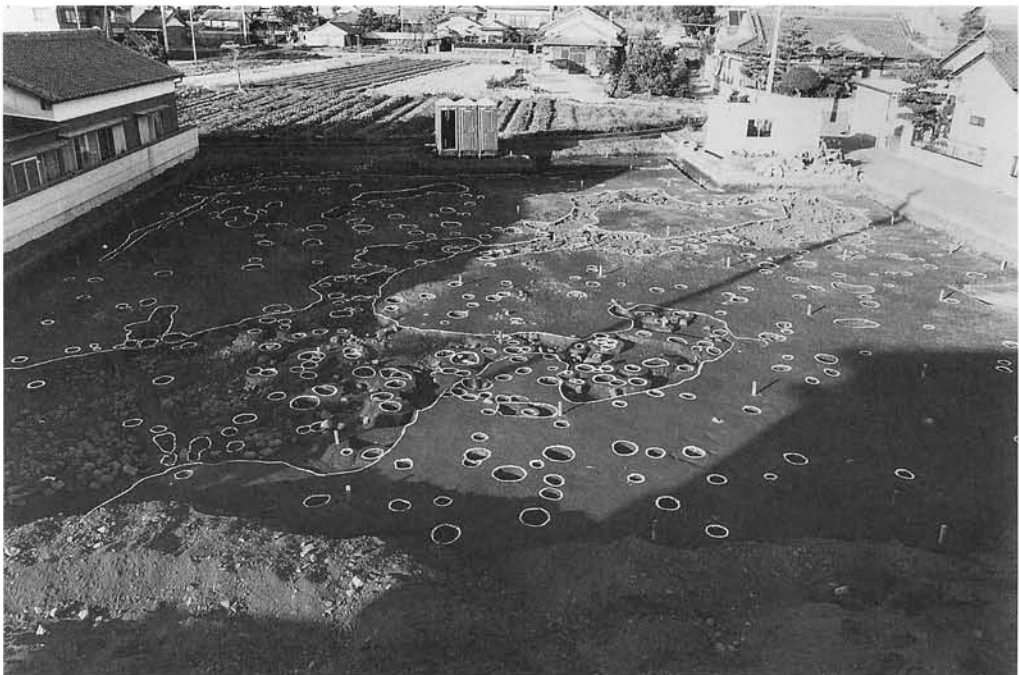
表3 遺物観察表 3

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口縁径 高さ 底径	形態・文様	手法	備考
Fig. 17 -31	P 11	弥生土器 甕	15.2 (1.8) —	—	口縁部のみ残存。頸部で屈曲し、口縁部は外湾ぎみに外上方に立ち上がる。底部は上方に僅かに拡張し、端面に凹線2条を巡らす。	内外面ともナデ調整。	
" -32	P 81	"	14.4 (5.2) —	—	口縁部が残存。体部は内傾して頸部に至り、緩やかに屈曲し、口縁部は外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	体部外面はハケ調整、頸部～口縁部外面はナデ調整。内面は下→上方向のヘラケズリ、及び不整方向のナデ調整。	
" -33	P 8	"	16.4 (8.9) —	—	体部下半は欠損。体部は緩く内湾して立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲して、口縁部は外上方に直線的にのびる。口縁端部は内傾する面をなす。	体部外面はハケ調整、口縁部外面はナデ・指頭押圧を施す。体部内面は下→上方向のヘラケズリの後、ナデ・指頭押圧を施し、口縁部内面はハケ調整。	
" -34	P 3	"	— (3.0) — 2.6	—	底部のみ残存。底部は平底で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	外面はタタキ、内面はナデ調整。底外面に植物茎部の圧痕がみられる。	
" -35	P 24	" 鉢	— (3.3) — 4.6	—	底部が残存。底部は上げ底状を呈し、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	外面はハケ調整、内面は単位明瞭なナデ調整。底部外面はハケ調整の後、指頭押圧を施す。	
" -36	P 21	"	— (3.2) — 2.8	—	底部のみ残存。底部は平底で、体部は緩く内湾して外上方に立ち上がる。	内外面とも摩滅が著しく、調整不明。(指頭押圧のみ観察される。)	
" -37	P 22	土師質土器 坏	13.0 (1.6) —	—	口縁部のみ残存。体部はやや内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。	ロクロ成形。内外面ともロクロによるナデ調整。	
" -38	P 49	" 皿	11.2 (1.3) —	—	底部は欠損。体部はやや外湾ぎみに外上方に立ち上がり、口縁部直下で上方に屈曲して一段をなし、口縁部は更に屈曲して外方にのび、端部は丸くおさめる。	手づくね成形。内外面ともナデ調整。	
" -39	P 56	" 坏	9.0 (2.0) —	—	口縁部のみ残存。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は僅かに外湾し、端部は丸くおさめる。	ロクロ成形。内外面ともロクロによるナデ調整。	
" -40	P 69	"	— (2.2) —	—	口縁部のみ残存。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部は尖る。	"	
" -41	P 79	瀬戸焼	— (3.5) —	—	体部片。		
" -42	P 68	備前焼 播鉢	— (2.7) — 12.0	—	底部片。底部は平底で、体部は上方に一段屈曲した後、外上方へのびる。	ロクロ成形。外面はナデ調整、内面はナデ調整の後、縦～斜方向の条線(2～3条/cm)を施す。	
" -43	P 53	土 鍾	全長 4.4 全幅 1.4 全厚 0.6 孔径 0.2 重量(φ)10.0	—	ほぼ完形。土師質で、楕円形を呈す。	表面は剥離が著しく、調整不明。穿孔は片側からである。	

圖 版



遺構検出状況（南より）



遺構完掘状況（南より）

PL. 2



遺構検出状況（北より）



遺構完掘状況（北より）



遺構検出状況（北東より）



遺構完掘状況（北東より）

PL. 4



調査区西壁セクション（東より）



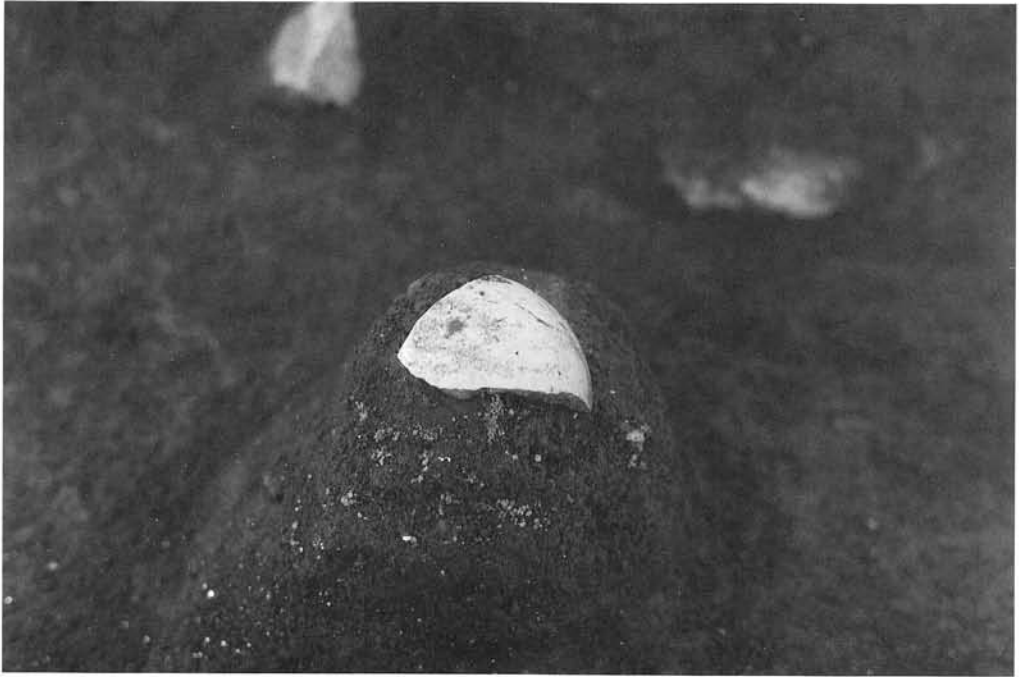
同 上 （南東より）



調査区東壁セクション（西より）



調査風景（南西より）



S D 1 土師質土器皿 (17) 出土状況



S D 1 須恵質土器 (20) 出土状況



SD 1 備前焼壺 (23) 出土状況



SD 1 土師質土器鍋 (28) 出土状況

PL. 8



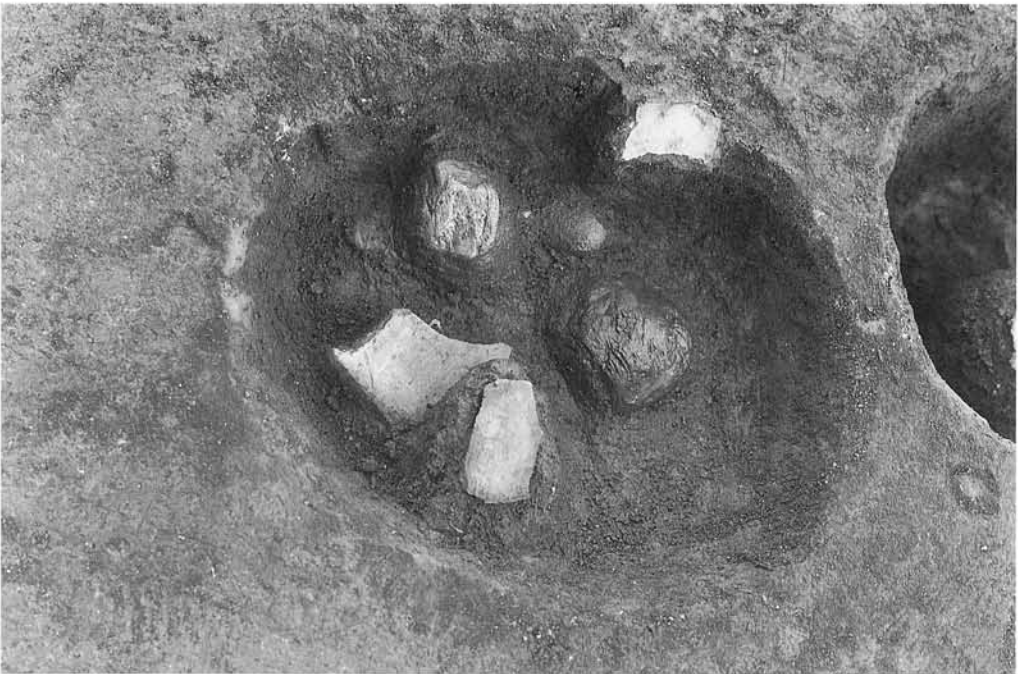
SD 3 (北東より)



P 3 弥生土器 (34) 出土状況



P 8 ・ P 9 (南より)



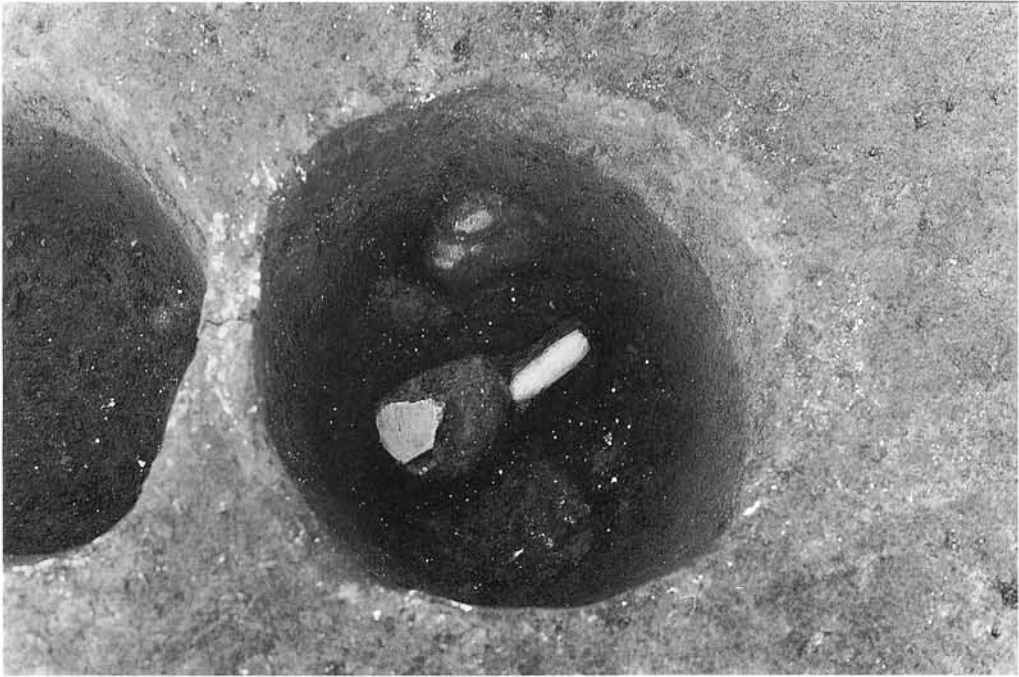
P 8 弥生土器 (33) 出土状況



P21 (西より)



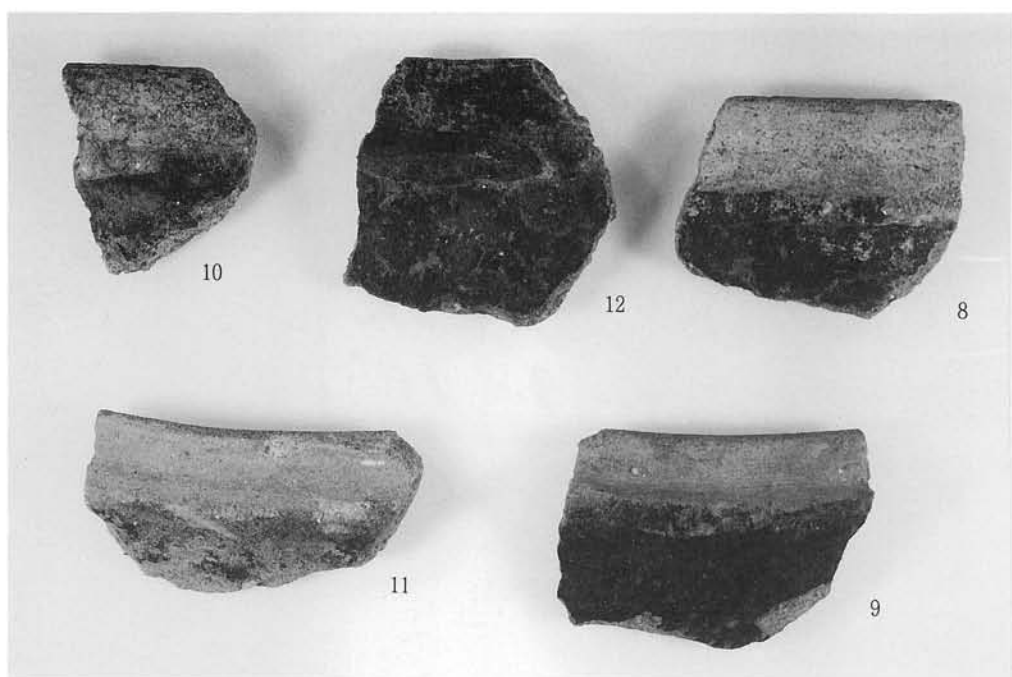
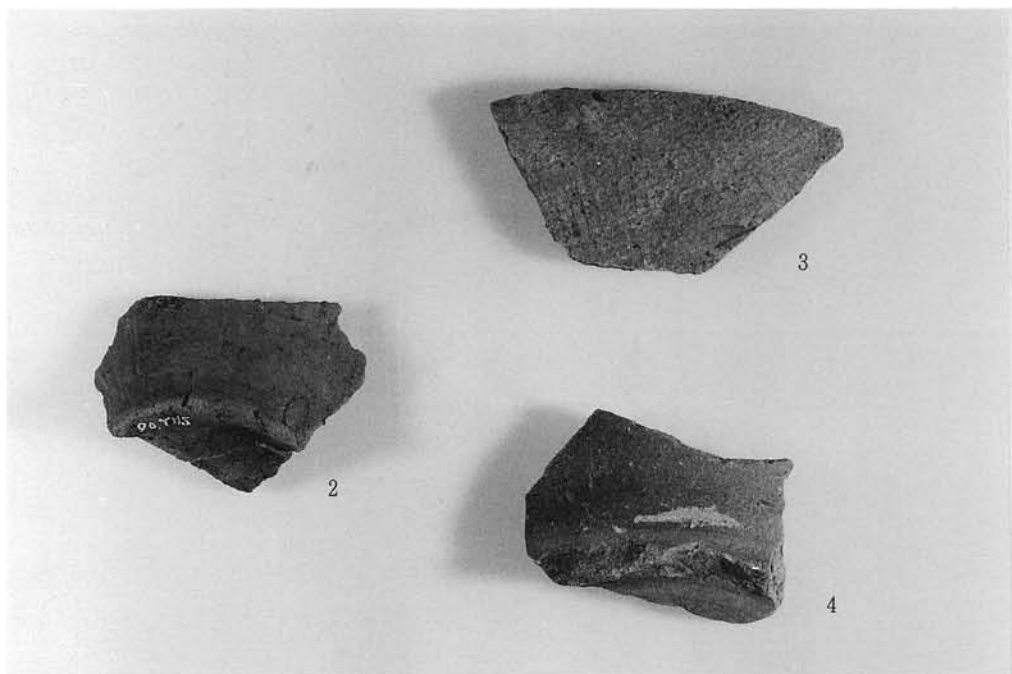
P21 弥生土器(36) 出土状況



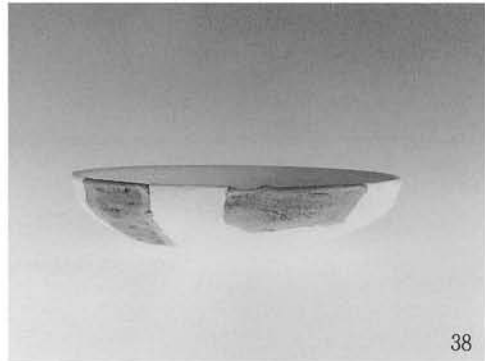
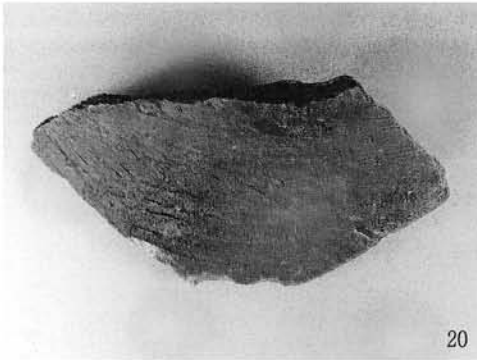
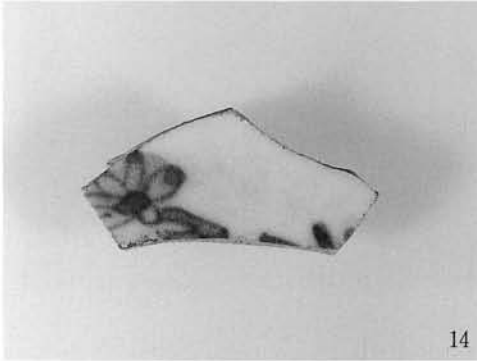
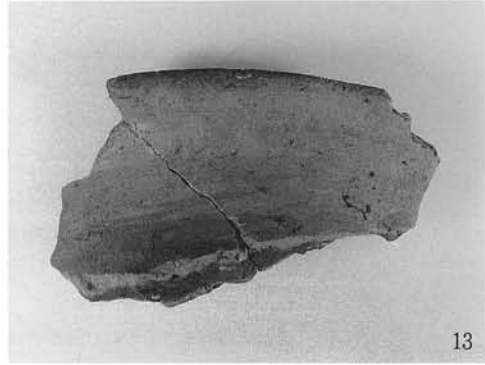
P53 土鍾(43) 出土状況



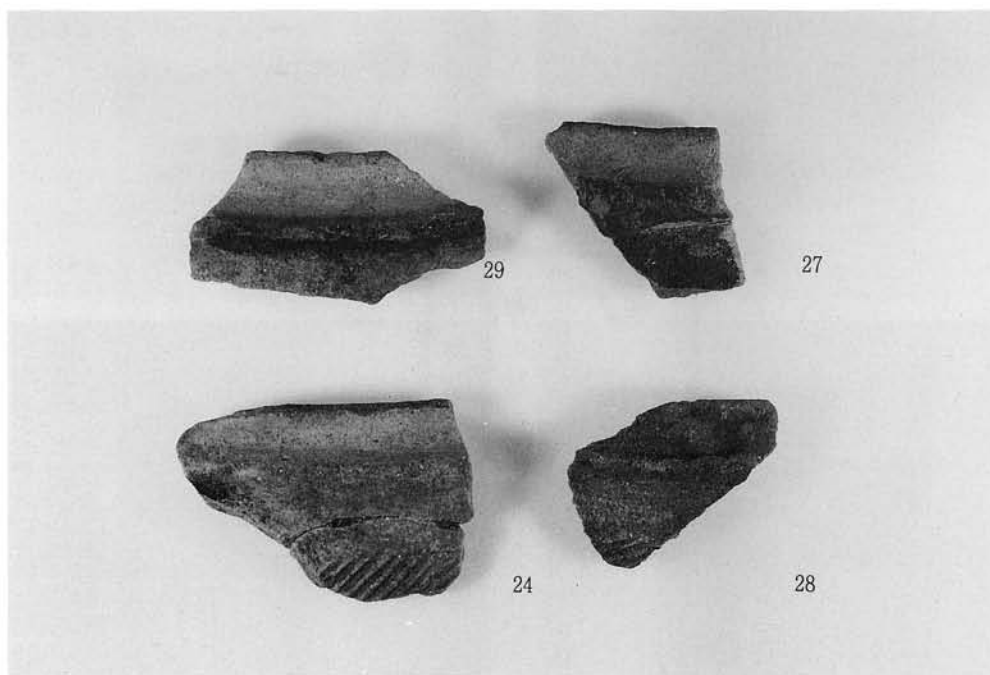
P81 弥生土器(32) 出土状況



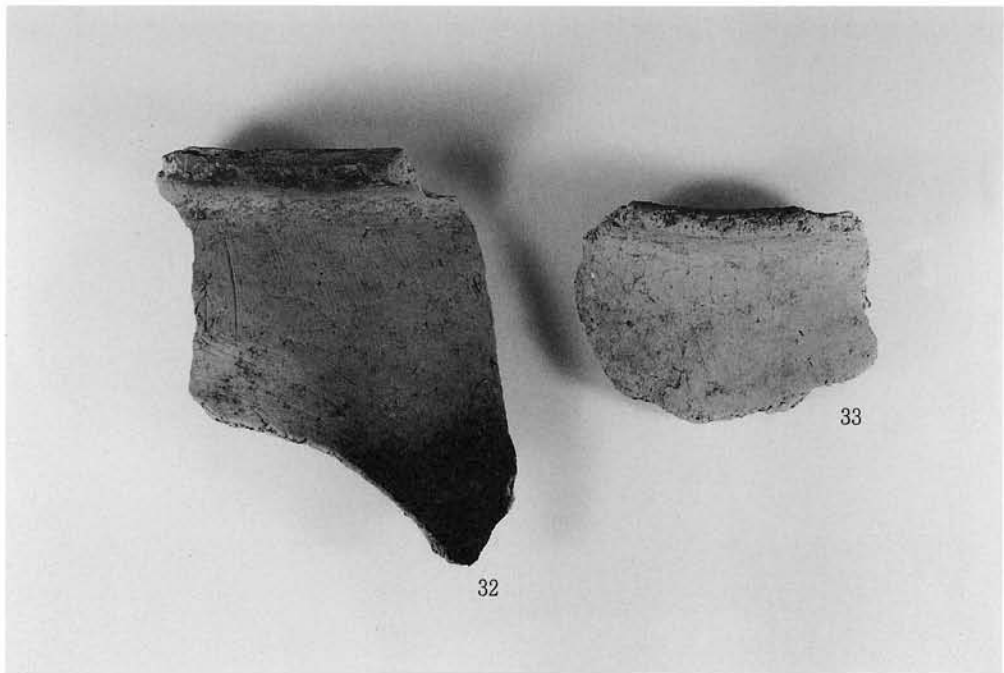
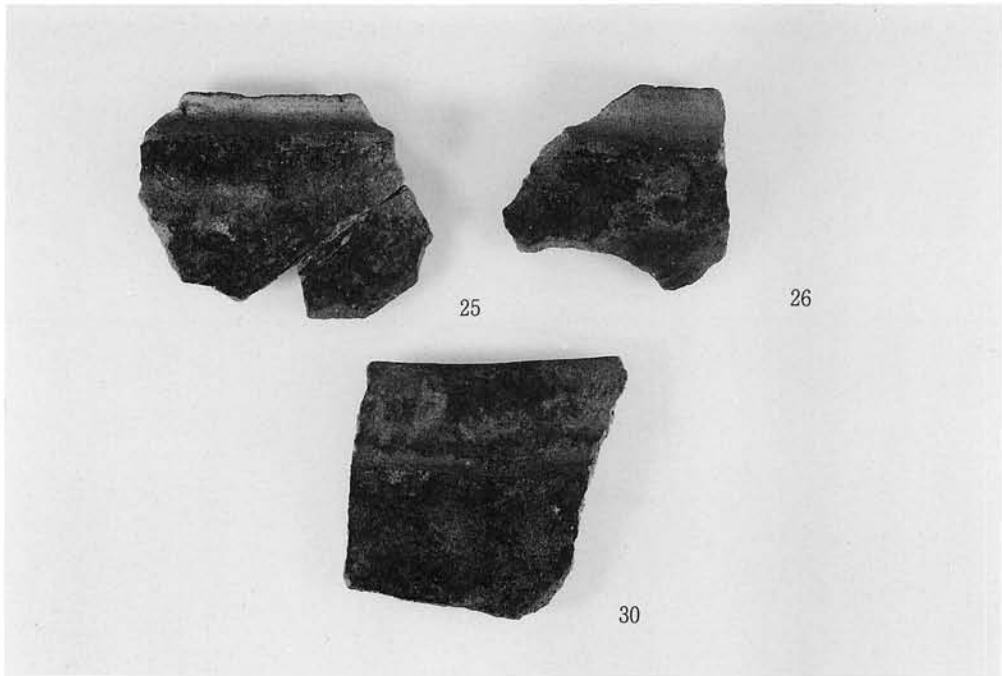
出土遺物 1 (表採・包含層出土)



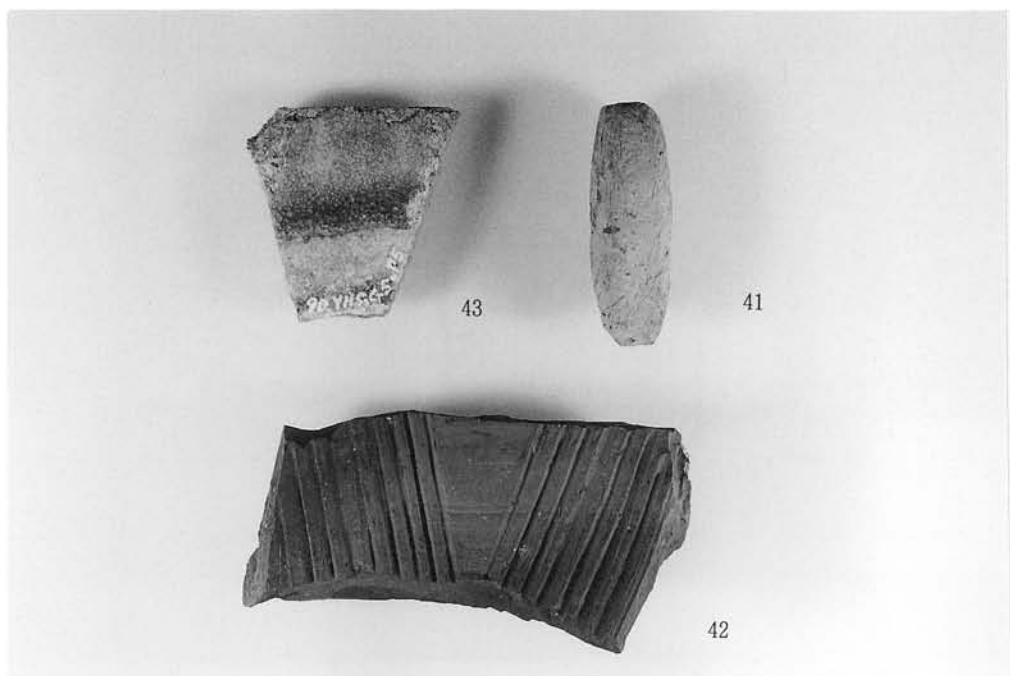
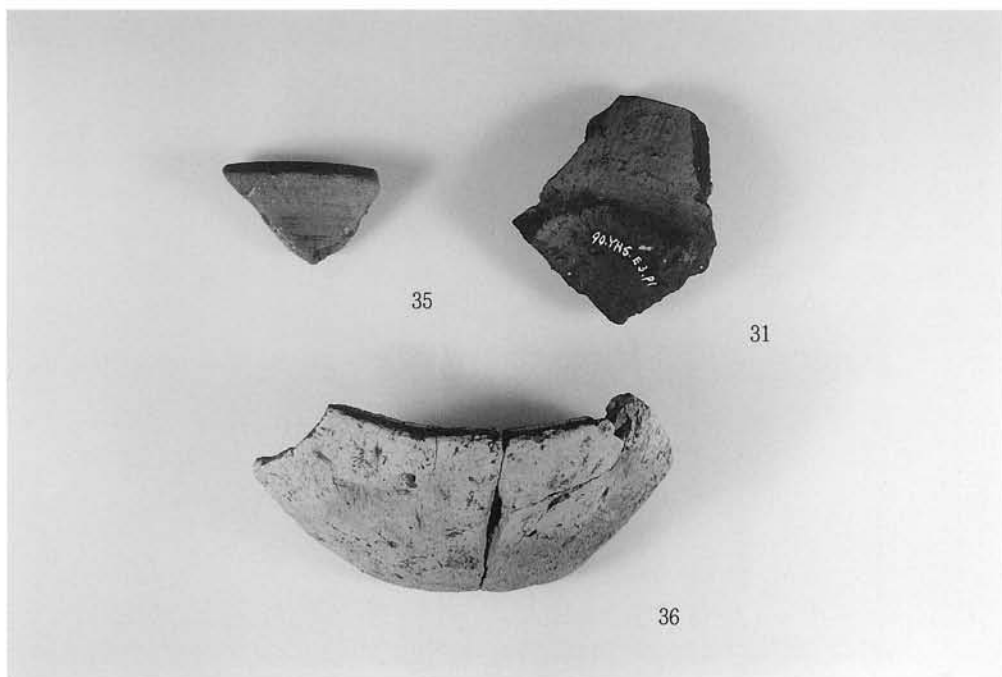
出土遺物 2 (表採・SB 4・SD 1・P 3・P 49出土)



出土遺物3 (SD1出土)



出土遺物4 (SD1・P8・P81出土)



出土遺物 5 (P11・P21・P24・P53・P68・P79出土)

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集

ひびのきサウジ遺跡Ⅱ

上佐山田観光開発株式会社寮建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992・3・31

発行 財高知県文化財埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
TEL 0888-64-0671

印刷 川北印刷(株)



付図 ひびのきサワジ遺跡全体図

